

粕屋町文化財調査報告書第 40 集

内橋鏡遺跡 2 次調査・内橋カラヤ遺跡

2017

粕屋町教育委員会

はじめに

本書は、県道福岡東環状線拡幅工事に伴い、平成27年度に粕屋町教育委員会が実施した、粕屋町大字内橋に所在する内橋鏡遺跡2次調査及び内橋カラヤ遺跡の記録です。

調査地周辺は古代の遺跡が多く存在し、斐怡墓群を検出した内橋鏡遺跡1次調査や銅鏃が出土した戸原鹿田遺跡などの弥生時代の遺跡をはじめ、糟屋郡最大規模の掘立柱建物や大宰府式瓦葺が出土した内橋坪見遺跡、精巧で大型の横板組井戸と貴賓専用の精美な土師器が見つかった内橋牛切遺跡、多々良川の河口で物資集積施設として栄えた多々良田遺跡などの奈良時代の遺跡が周囲にあります。さらに大宰府と都を結ぶ官道が調査地近辺を通過していることからみましても、海上・河川・陸上交通が交わる重要な地域であったことがうかがわれます。

このような立地環境のもと、内橋鏡遺跡2次調査では1次調査で発見した遺跡の広がりを確認したことや、内橋カラヤ遺跡では地中に埋没していた前方後円墳が発見されたことは大きな成果であったといえるでしょう。

しかしながら、遺跡全体のうちのわずかな範囲を調査したに過ぎません。遺跡がどのような性格であったのかは、今後の周辺地域の調査によって次第に明らかになっていくことと思います。本書が郷土の歴史に誇りを持ち、文化財に対する理解を深める上で広く活用されとともに、研究資料としても貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係者の方々をはじめ、近隣住民の皆様から謝意を表します。

平成29年3月31日
粕屋町教育委員会
教育長 西村 久朝

01 経過・位置と環境

- 01 調査に至る経過
- 03 調査体制
- 03 地理的環境
- 04 歴史的環境

05 内橋鏡遺跡2次調査

- 06 調査概要
- 06 竪穴建物
- 08 掘立柱建物
- 08 溝状遺構
- 09 墳墓

- 17 その他の遺構
- 17 おわりに

19 内橋カラヤ遺跡

- 20 調査概要
- 20 前方後円墳
- 27 方形周溝墓
- 27 竪穴建物
- 28 掘立柱建物
- 28 不明遺構
- 28 その他の遺構
- 29 おわりに

周辺の調査遺跡

内橋坪見遺跡1次調査	『内橋坪見遺跡概要報告書』粕屋町教育委員会2013 本報告書近年刊行予定
内橋坪見遺跡2次調査	近年刊行予定
内橋坪見遺跡3次調査	『内橋坪見遺跡3次』粕屋町教育委員会2015
内橋牛切遺跡	『内橋牛切遺跡』粕屋町教育委員会2013
内橋登り上り遺跡第1地点	『内橋登り上り遺跡』粕屋町教育委員会1994
内橋登り上り遺跡第2地点	『内橋登り上り遺跡第2地点』粕屋町教育委員会1997
内橋登り上り遺跡第3地点	『内橋登り上り遺跡第3地点』粕屋町教育委員会1997
内橋登り上り遺跡第4地点	『内橋登り上り遺跡第4地点』粕屋町教育委員会2001
内橋鏡遺跡	『内橋鏡遺跡』粕屋町教育委員会2015
内橋鏡遺跡2次調査	本書
内橋カラヤ遺跡	本書

【内橋鏡遺跡2次調査の呼称について】

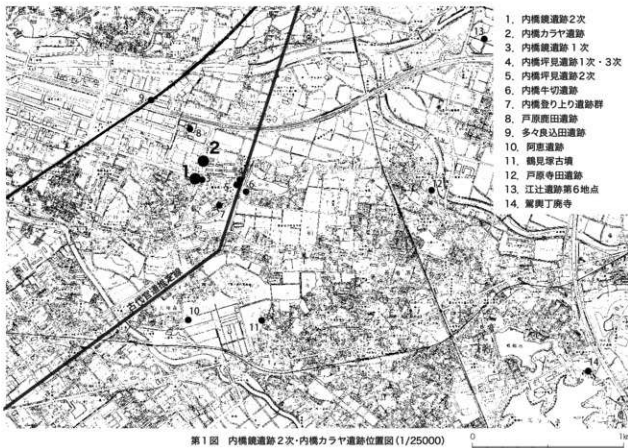
遺跡名あるいは場所を示す場合は、「内橋鏡遺跡2次」と呼称する。

発行	粕屋町教育委員会
調査起因	県道拡幅工事
現地調査	平成27年6月22日～平成28年3月2日
整理調査	平成28年4月4日～平成29年3月31日
使用方位	国土座標第Ⅱ系(世界測地系)
遺構実測	福島日出海・永島聡士
遺構撮影	西垣彰博
遺物実測	福島日出海・永島聡士
遺物撮影	高橋幸作
製図	高橋幸作・毛判頭寿代・西川津由美
執筆	福島日出海・西垣彰博
編集	西垣彰博

本書に関わる遺物・記録類は、粕屋町歴史資料館にて取蔵・管理し、公開する予定である。

経過・位置と環境

近隣には、葉棺墓群を検出した内橋鏡遺跡、銅鏡が出土した戸原鏡田遺跡、青銅製鋤先が出土した内橋登り遺跡・内橋坪見遺跡がある。また、内橋坪見遺跡は古代官道推定線に隣接し、地域最大規模の圓立柱建物や大宰府式鬼瓦を含む多量の瓦が出土している。



調査に至る経過

内橋鏡遺跡2次調査及び内橋カラヤ遺跡は、福岡県糟屋郡粕屋町大字内橋字鏡595-1地において、県道福岡東環状線拡幅工事が計画されたことに起因する。

平成27年4月27日に、福岡県福岡県土整備事務所より粕屋町教育委員会へ埋蔵文化財事前審査願書が提出された。申請地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である内橋鏡遺跡に含まれる旨を回答した。平成27年5月8日、20日～25日に確認調査を実施したところ、隣接する

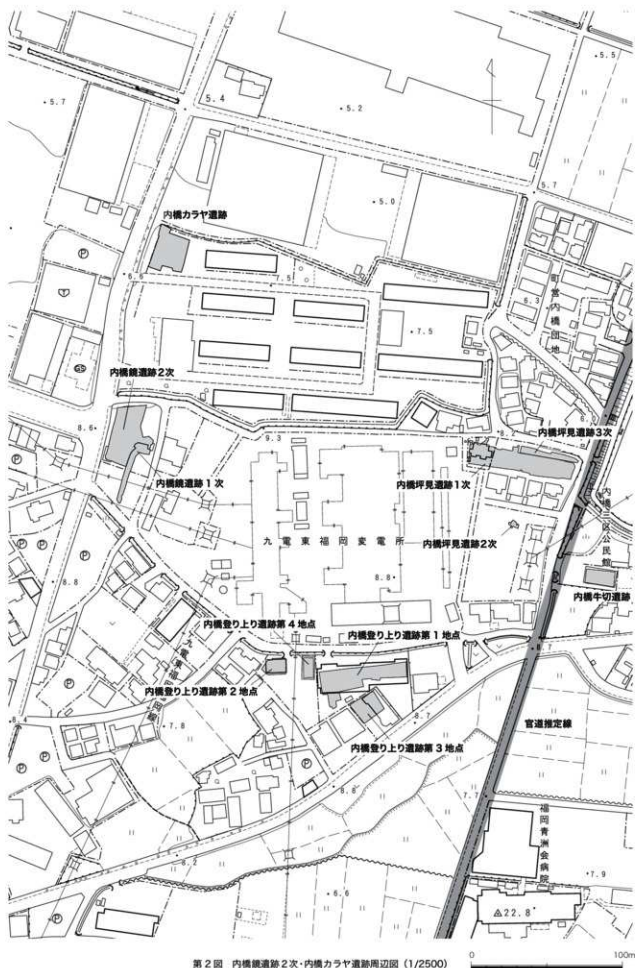
内橋鏡遺跡1次の遺構が広がっている状況を確認した。また内橋鏡遺跡の北約100mの地点でも遺構を検出し、内橋カラヤ遺跡として新規の包蔵地登録を行った。確認調査の結果をもとに福岡県福岡県土整備事務所と協議を重ねたが、工法計画の変更は難しく、記録保存の発掘調査を実施し、調査終了後に工事着手することとした。

発掘調査は、内橋鏡遺跡2次を平成27年6月22日から平成27年10月18日、内橋カラヤ遺跡を平成27年10月13日から平成28年3月2日の期間において実施した。なお、内橋カラヤ遺跡

において、墳丘削平によりその存在が知られていなかった前方後円墳の新たな発見に至り、平成27年12月23日に現地説明会を行ったところ、約50名の見学者に参加いただいた。

報告書作成に係る出土遺物整理作業は、両遺跡とも平成28年4月4日から平成29年3月31日の期間において実施した。出土遺物及び図面・写真等の記録類は粕屋町立歴史資料館にて保管している。

なお、調査期間中は、福岡市経済観光文化局久住猛雄氏より貴重なご意見・ご指導をいただいた。また、地域住民の



第2図 内橋通り道路2次・内橋カラヤ道跡周辺図 (1/2500)



第3図 内橋遺跡2次・内橋カラヤ遺跡周辺図 (1/1000)

方々には調査の趣旨にご理解を得るとともに、多大なご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

調査体制

平成27年度（発掘調査）
 調査主体 粕屋町教育委員会
 教育長 大塚豊
 教育委員会事務局次長 関博夫（前任）、石山裕（後任）
 社会教育課長 新七信久
 社会教育課文化財係長 西垣彰博
 同係嘱託職員
 福島日出海（調査担当）、高橋幸作、鬼玉駿介、永島総士、松永メイ子

平成28年度（報告書作成）
 調査主体 粕屋町教育委員会
 教育長 西村久朝
 教育委員会事務局次長 大石進
 社会教育課長 新七信久
 社会教育課文化財係主幹 西垣彰博
 同係主事 高橋幸作
 同係嘱託職員
 福島日出海（報告書担当）、阿部悠理

地理的環境

福岡県糟屋郡粕屋町は、福岡市の東に隣接し、粕屋平野の中央に位置している。町域は14.12km²と小さく平坦な地形である。

粕屋平野の西は博多湾に面し、南側は太宰府市の四王山系から伸びる月隈丘陵によって福岡平野と区分される。東側の三郎山系、大嶋山系を源とする3本の河川が平野を貫流し、北から多々良川、須恵川、宇美川の順で博多湾へ注いでいるが、山地から舌状に派生する丘陵が多く伸びているため、沖積地は河川流域に限られている。また、平野の北側には立花山系があり、博多湾に面して盛りを山地で囲まれた小さな平野である。

内橋坪見遺跡は、福岡市との町域に近い標高8m程の多々良川下流域に位置しており、乙犬丘陵から派生する舌状低

丘陵の上に立地している。古代の周辺環境は、多々良川・須恵川・宇美川の合流する河口付近が、入江状の内海を形成していたと想定されている。遺跡はこの内海に近く、博多湾と3本の河川を利用した海上・河川交通の集中する場所にあたる。

歴史的環境

多々良川流域は、弥生時代において青銅器生産が知られる地域であり、多々良川対岸の福岡市上井遺跡群、多々良川平田遺跡群では青銅器鋳型が出土している。粕屋町域でも、戸原曲田遺跡で銅鏡、本遺跡に隣接する内橋登り上り遺跡第1地点と内橋坪見遺跡の2か所で青銅製銅先が出土しており、青銅器生産を基盤とした集落展開の様相が明らかになりつつある。

このような地域的まとまりを背景に、古墳時代になると、多々良川流域には前期前方後円墳である戸原王塚古墳や名島古墳が築造される。今回の調査により、内橋カラヤ遺跡で発見した前方後円墳は、定期的に両古墳の間に築造されたこととみられ、前期古墳の首長系譜を補充するものと評価できるだろう。その後、中期には首長級の古墳は見られなくなるが、後期になると全長80m級の前方後円墳である鶴見塚古墳が突如築造される。「日本書紀」によると、528年に磐井の乱に連座した罪を免れるため、磐井の子葛子が糟屋屯倉を献上したとされる。比定地については、古賀市龍田道跡跡が候補地の一つに挙げられているが、鶴見塚古墳は、墳丘規模や石室構造等郡津官家の管掌者の墓ともいわれる福岡市東光寺刺塚古墳と共通する部分が多い。箱崎の内海から須恵川を遡上した場所に位置する立地も、非常に示唆的である。

古代については、阿恵遺跡で糟屋郡面と考えられる政庁と正倉群が見つかっている。現在も調査中であるが、7世紀代の糟屋評面に通ることが明らかになれば、698年に製作された国宝京都妙心寺梵鐘の金石文で知られる「糟屋評造春米連広龍」が政務を行っていた役所跡として判断できる。糟屋評は評造名が判明している数少ない評面であり、文字資料による人物名と考古学的調査による遺跡比定

地が合致する全国的に見ても稀有な事例となる。

古代には駅路が整備され、都と大宰府を結ぶ官道が、本遺跡の近隣を通過している(前記)。内橋坪見遺跡では、8世紀代における糟屋郡最大規模の掘立柱建物2棟や、その建物群を囲う柵や溝を検出しており、8世紀後半の遺物と共に伴する大宰府式鬼瓦や赤色顔料が付着した刷切軒平瓦など多量の瓦も出土した。

この駅路沿いの粕屋町周辺のどこかに夷守駅が存在したことが想定され、以前は、現在の地名に残る「日守」周辺、後述の多々良川道跡などが候補地に挙げられていた。夷守駅は、駅使の送別の際に、万葉集巻四566「草枕旅行く君を愛しみ満ひてぞ来し志賀の派遣を」が詠まれた場所であり、大宰府官人が職別の飲食を行う特別な駅家であったと考えられる。別れの儀礼は、水城東門における大伴旅人の万葉歌でみられるように境界で行われた。大宰府にとって最も身近な境界は水城であるが、その外側にある日常行動圏の境界の一つに、粕屋平野の北を巡る立花山山系がある。立花山の麓に位置する香椎宮は、古代の大宰府官人が定期的に参詣に訪れており、この付近までが日常行動圏の境界であったと考えられる。同じように、立花山系を背後に控えた内橋周辺も、地理的・心理的にみて、大宰府にとっての境界として意識されていたことは想像に難くない。内橋坪見遺

跡を夷守駅の候補地として考えておきたい。

その夷守駅が置かれた官道に近く、多々良川に隣接した低地に多々良川道跡がある。掘立柱建物群と多くの船載品や、役人の存在を示す石帯などが出土している。以前は郡面や夷守駅とみる見解もあったが、阿恵遺跡や本遺跡の発見により、そのいずれの可能性も低くなった。やはり、立地環境と多様な出土品を考えると港湾施設としての性格が想定できるところではあるが、単なる郡津レベルではなく、大宰府の影響が強い港の1つと思われる。それは多々良川道跡で大宰府式鬼瓦が出土していることから指摘できるであろう。

一方、多々良川中流域に目を転じると、8世紀後半の倉庫群を含む掘立柱建物群や、白磁大皿、薄彩水注などの官衙級の輸入陶磁器、「加麻又郡」のへう書き須恵器等が出土した江上道跡第6地点がある。何らかの公権力の統制下に置かれた一群であると考えられる。

また、乙犬丘陵から派生した低丘陵上に、8世紀後半頃の創建とされる眞興丁廃寺がある。伽藍配置等の遺構は不明であるが、塔心礎が出土しているため寺院跡であることは間違いない。

粕屋町周辺は、糟屋屯倉、官道、夷守駅、港、郡面、寺院などがあり、古代史を考えるうえで鍵となる重要な要素をもっている地域といえるだろう。



調査地付近より博多湾を望む(東から)

内橋鏡遺跡2次調査



第1号奥棺墓（北6-5）

内橋鏡遺跡2次調査

本調査は、内橋鏡遺跡2次調査の記録であり、隣接する1次調査でもみられた弥生時代の墓域の広がりを確認した。また、竪穴建物・掘立柱建物・溝など古代の遺構を検出し、内橋坪見遺跡に関連する官衙域の展開も伺うことができる。

調査概要

今回の調査では、1次調査時に確認した弥生時代中期前半から中頃にかけての墳墓群に木棺墓2基・甕棺墓2基を追加した。調査区南側では古代の掘立柱建物1棟と古墳時代の溝状遺構を検出した。その他、調査区中央から北側にかけて古代初期の竪穴建物1軒、古墳時代の土壇墓1基と時期不明の土壇墓2基を検出した。

遺物は主に南側から出土しており、完形の土師器杯1点以外は破片である。杯や魚げ跡の残る甕は飲食関連だろうが、蔵容器に使用されるような須恵器の短須恵はやや特殊か。

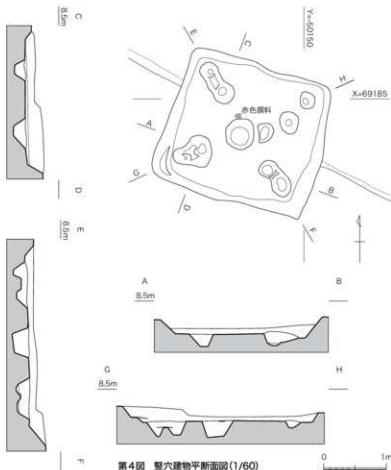
1～3須恵器、1坏蓋で口径11.2cm、色調は暗青灰色で胎土に砂粒を含むが焼成は良好。2坏蓋で内面のかえりは口縁端部から1.1cm内側に付き、色調は灰白色。3短須恵で肩部はなで肩、頸部に1

条の沈線が彫る。調整は内面に青海波の当具痕が残るが外面のタキキ痕はナデ消す。色調は灰白色で焼成は甘く軟質。4～7土師器、4完形の坏で口縁部は外反気味、底部付近が厚手で丸味を持ち底部がやや張り出す。口径14cm、器高3.5cm、底径10.6cm、色調はにぶい橙色で胎土に砂粒を含み焼成はやや甘く軟質気味。調整は体部の内外両面を横位のナデ、底部は手持ちのヘラクスリ。5坏で口径

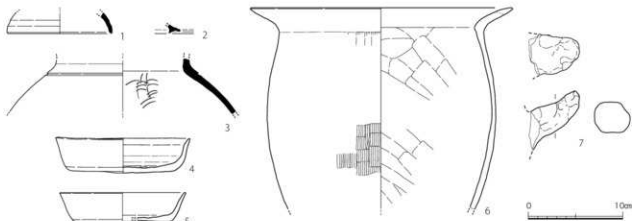
竪穴建物(第4図)

調査区の北側に位置し、平面形は正方形の方形プランで南東コーナーにテラス状の段を有する。規模は長軸長(東西)2.54m、短軸長(南北)2.24m、深さ27cm、床面積が約5㎡と小規模である。中央のピットは直径46cm、深さ24cmの中心柱で、中心より対角線上に四主柱が位置する。主柱は2個のピットが連結する2連1組のもので、それが4か所に配される。中心柱と四主柱それぞれの間隔は70～80cm、主柱間は80cm～1.1mと何れも狭く、各柱穴間には1㎡程度の面積が残される。これは大人4人が対座する程度の広さである。このように規模と構造が特殊な上に炉やカマドはなく、中心柱北側には赤色顔料も残されていることから、通常の住居とは異なる用途を考えねばならない。

竪穴建物出土遺物(第6図)



第4図 竪穴建物平面図(1/60)



第6図 竪穴建物出土遺物実測図(1/4)

13.2cm、器高3.1cm、底径10.2cm、色調や調整等は4と同じで形状の特徴も一致する。ただし、やや薄手のつくりで上げ底に仕上げる点は異なる。6甕で口縁部は長く外反し頸部内面に稜線をもち、胴部は張らずに長調気味。口径27.6cm、胴部最大径24.3cm、器壁は内面のヘラケズリで4～7mmに調整、色調はにぶい橙色で内面に焦げ付きが残る。胎土は粗い砂粒を多く含み、焼成はやや甘く軟質気味。器面は磨減するが、タケハケの調整痕が一部に残る。7瓶の把手で色調は橙色、焼成はやや甘く軟質気味。

竪立柱建物(第7図)

調査区南側に位置しており2・3間の南北棟でN-9°-Eの棟方位をとる。柱間は梁行側1.92m・2.1m、桁行側2.1m、梁行長14尺の4.02m、桁行長21尺の6.3mに復元され柱間は7尺で統一されようか。柱穴は径44～50cmの円形で深さ25～27cmを測る。

竪立柱建物出土遺物(第8図)

8～12須恵器、8环蓋で嚙状口縁は丸味をおび、内面の段が浅く屈折も緩い。色調は黄灰色で胎土は良いが焼成がやや甘く軟質気味。9环蓋で嚙状口縁は形骸化し内面も直線的となる。10环身で口縁部は直線的に外反し先端は尖り気味となる。器壁は3～4mmと薄い。色調は灰白色で胎土に石英粒を含み、焼成は甘く

軟質。11环身で口縁部は直線的で緩やかに外反し内面底部の屈曲は力強い。色調は灰白色で胎土焼成ともに良好。12皿で底部からの立ち上りは丸味をもって緩やか。13土師器の椀で体部は緩やかな丸味をもって垂直気味に立ち上り、口縁部は方形で稜線が明瞭。口径16.3cm、色調は明赤褐色で焼成はやや甘く軟質気味。

面オリーブ灰色で胎土に粗い石英粒を含むが焼成は良好。15环身で立ち上りは内傾し高さ7mm、体部のラインは直線的で容量は浅い。色調は灰色で胎土焼成ともに良好。16土師器で牛角状を呈した瓶の把手、現長7.2cm、幅3.7cm、色調は赤褐色で胎土に粗い石英粒を多く含み焼成も甘く軟質。調整は表面剥落のための判然としながいユビオサエの痕がわずかに残る。

溝状遺構

1号溝は北側の谷に向かって下り幅広となるもので、排水関連と考えられる。2号溝は底浅で幅が狭い上に傾斜が重なり切れ切りの状態のまま、各所で短いスパンで確認されたため当初は個別の溝として番号を付していたが、全体図の中で一連のものだと判断した。

1号溝(第9図)

1号溝は調査区北側に位置し北に向かって幅広となり、緩やかに下りて谷に流れ落ちるものである。長さ8.06mまでを検出、最大幅1m、深さ18.4cmを測る。

1号溝内出土遺物(第12図)

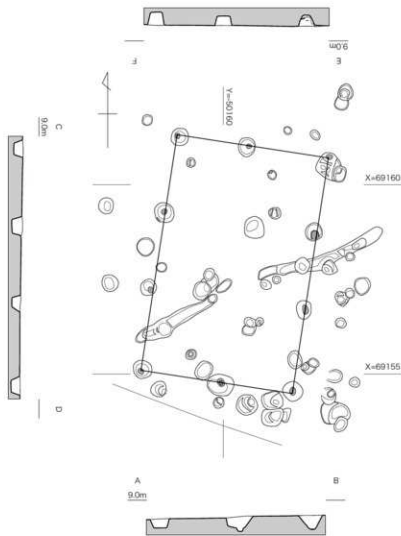
14・15須恵器、14环蓋で平坦な天井部外面は回転ヘラケズリが施され、後にヘラ記号が付される。内面は横位のナデによる調整を行う。色調は外面灰色、内

2号溝(第10・11図)

2号溝は調査区の南から中央にかけて存在し、全体に径19m程の半円状をなす。幅26～40cm、深さ15～25cm、底部の所々に1.6～1.8mの間隔でピットが掘り込まれる。

2号溝内出土遺物(第12図)

17須恵器环身で立ち上りは内傾気味で端部が直立する。高さは7mm、受部から底部へのラインは直線的で内面の屈折部は沈線状を呈す。口径10.8cm、受部径13.1cm、現高3.2cm、色調は明灰色で胎土に1～2mmの砂粒を含み、焼成は良好。18・19赤焼土器、18甕で口縁部は角張り口縁部がラバ状に開く。胴部はなで肩で胴部も長く底部は丸底となる。口径22.6cm、器高36cm、器壁厚6～7mm、色調は橙色で胎土に砂粒を多く含み焼成は甘く軟質。上半部は器面にタケキメが残り下半はそれをナゲ消す。また、胴部の中にカキメを施し内部全体には当具痕が見られる。19甕で内外両面にタケキによる調整痕が見受けられ



第7図 掘立柱建物平面断面図(1/100)

調は外面が黄灰色、内面は橙色で胎土に砂粒を含み、焼成はやや甘く軟質気味。

墳墓

1次調査で確認した弥生時代中期の墳墓群に木棺墓2基と甕棺墓2基を追加、その他、調査区内西端付近で時期不明の土壇墓2基、中央付近に古墳時代の土壇墓1基、北側に弥生時代中期の甕棺墓(小児棺)1基を確認した。

木棺墓(第13・14図)

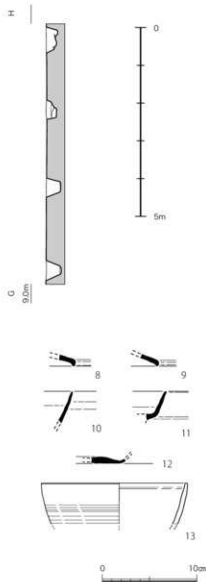
検出数は2基でいずれも明確に木棺の痕跡を留めているが、副葬品等の遺物

は検出されていない。1次調査時の6号甕棺墓の北東で一部検出された掘方は、今回検出された2号木棺墓に相当し、1号木棺墓も含め北東側への列埋葬の延長を確認した。

1号木棺墓(第13図)

墓壇は平面形の東西ラインが乱れるものの長方形を呈した2段掘り込みで、1段目の掘り込みは緩やかに傾斜する。中央の壇は断面形が逆台形を呈し、南北両側に木口板、東側には側板の差し込み口を示す溝状の掘り込みを持つ。この痕跡については確認できなかった。

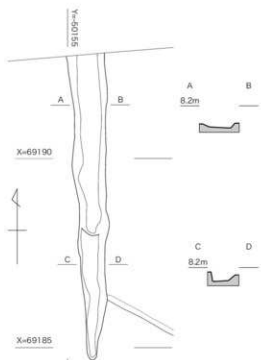
墓壇の規模は長さ1.78m、幅1.14m、深さ34cm、壇の底部の長さ1.22m、北



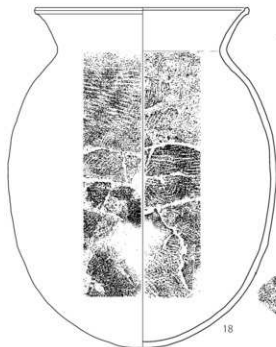
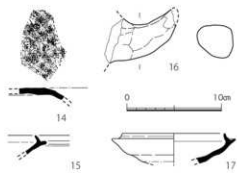
第8図 掘立柱建物出土遺物実測図(1/4)

端部の幅53cm、南端部の幅45cm。頭位に関しては北側がわずかに広く、底部も緩やかに南側に傾斜することから北側と推定。

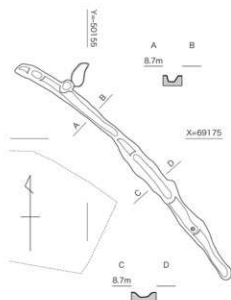
北側木口の長さ1m、幅10cm、南側木口の長さ90cm、幅25cm。東側の側板は全長1.23m、幅4cm前後となるが、痕跡が5か所に分割されることから、1枚板ではなく5枚程度の板を順に木口を下に充填する方法を採った可能性があ



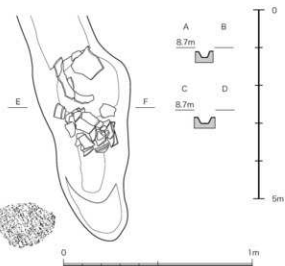
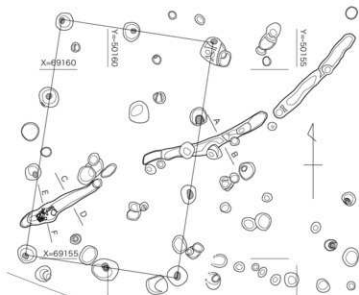
第9図 第1号溝平断面図(1/100)



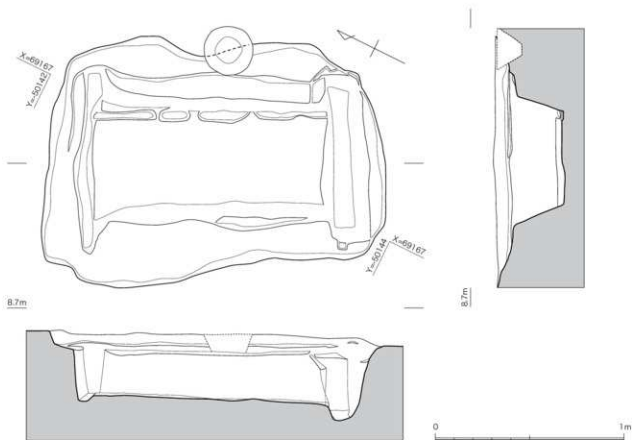
第12図 溝出土遺物実測図(1/4)



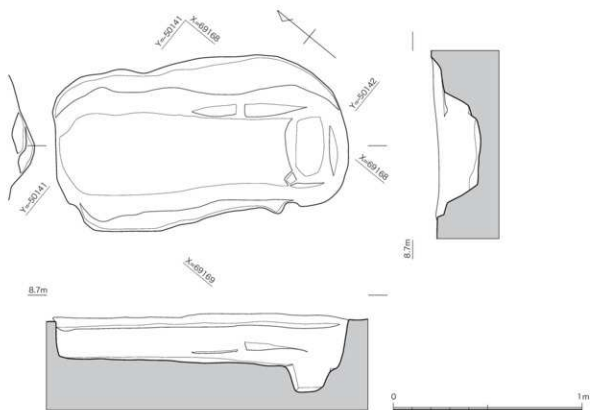
第10図 第2号溝北側平断面図(1/100)



第11図 第2号溝南側平断面図(1/100、E-Fのみ1/20)



第13図 第1号木棺墓基平面図(1/20)



第14図 第2号木棺墓基平面図(1/20)

る。主軸方位 $N-26^{\circ}-W$ 。

2号木棺墓 (第14図)

墓壙は隅丸長方形を呈した2段掘り込みだが、東西両脇に狭小な段を残す程度である。中央の壙は断面形が逆台形を呈し、南側のみに木口板の差し込み口を示す長方形の掘り込みが見られるが、北側木口板、両側板、底板の存在は確認できなかった。

墓壙の規模は長さ1.55m、幅84cm、深さ26cm、壙の底部の長さ1.2m、北端部の幅43cm、南端部の幅35cm、南側木口の長さ40cm、幅23cm。頭位に関しては北側がわずかに広く、底部も緩やかに南側に傾斜することから北側と推定。主軸方位 $N-39^{\circ}-W$ 。

壙棺墓

検出数は3基で大型壙棺墓2基(1基は墓壙の一部のみ)と小児壙棺墓1基であり、墓壙の一部を検出した3号壙棺墓は1、2号木棺墓の北側に位置しており同一の墓群を構成する。しかし、1号壙棺墓は1次調査時の第1号壙棺墓と主軸方位は一致するものの位置的に列埋葬から遊離しており、別の一群か単独埋葬の可能性がある。調査区中央の小児壙棺墓に至っては全くの別群であり単独の存在と判断する。

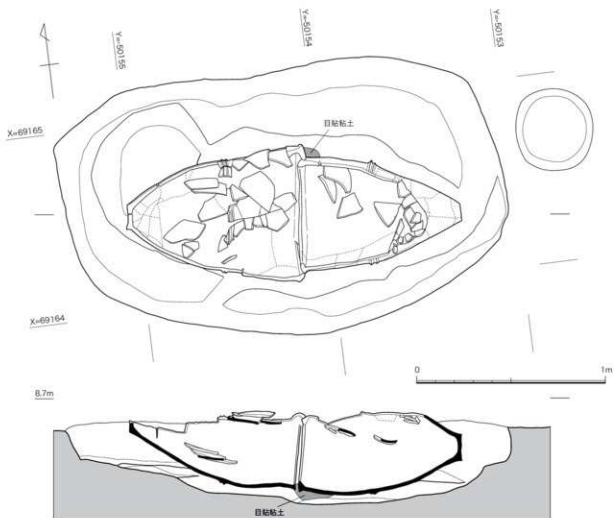
1号壙棺墓 (第15図)

成人用大型棺で削平により上半部を欠損、位置的に段独埋葬の可能性がある。墓壙は隅丸長方形を呈し内部は3段状に掘り込まれており、墓壙最の最深部に

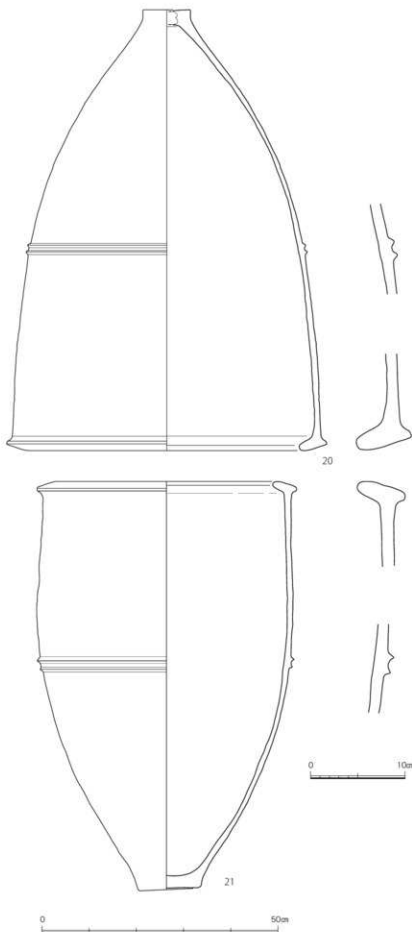
下甕を据え、やや高い中央付近に上甕を埋設する。上甕底部は最も浅い西側に位置するため、全体に東に緩やかな傾斜となる。これは墓壙西側を入口とし縦穴を設けた後に、東側に向け緩やかな段状傾斜の横穴を掘るものと考えられる。墓壙の規模は長さ2.41m、幅1.4m、深さ43cm。上下の甕は何れも埋葬用の大型棺を使用した接口式であろうか。上甕はやや大きく目詰りの粘土を検出したが、下甕は上甕に若干挿入した状況が見られ、その際に上甕下方の口縁部を打ち欠いたことが観察された。主軸方位 $N-83^{\circ}-E$ 。埋置角 -5° 。

1号壙棺上甕 (第16図)

口縁部は外側に傾斜した丁字状を呈し、口縁端部は甲羅な稜線をもって角張り外方に少し突出する。内部は厚く丸味



第15図 第1号壙棺墓平面図(1/20)



第16図 第1号壺棺実測図 (1/8、口縁・突帯 1/4)

を帯びて大きく突出する。胴部は口縁部付近に最大径があり、下方に向かって緩やかなカーブを描きながら砲弾型の形状を呈す。胴部中央付近にはみかけ2条つくりの1条突帯を貼り付け、底部は上げ底気味で胴部との境は緩やかな直線的ラインを示す。

口径66.7cm、器高93.3cm、底径10cm、胴部最大径65.2cm、突帯幅2.4cm、突帯の位置は上端から42.7cm、下端から50.6cmを測る。色調は赤褐色で胎土は1mm前後の石英粒が多いが、中に5mm前後の粗い粒を微量に含み(全体に下巻より少ない)、焼成は甘く軟質で底部及び突帯付近に黒斑が見受けられる。調整は内外面ともにナデにより丁寧に仕上げる。

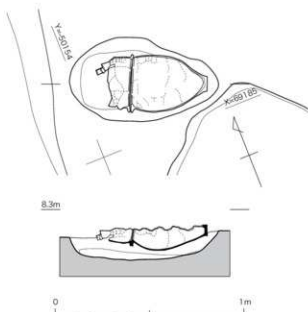
1号壺棺下巻(第16図)

口縁部は外側に傾斜したT字状を呈し、口縁端部はやや丸みを帯びて外方に少し突出する。内部は厚く丸味を帯びて大きく突出する。胴部は上半部の最大径付近で一旦わずかに膨らんだ後、下方に向かって緩やかなカーブを描きながら砲弾型の形状を呈す。胴部中央よりやや上部にはみかけ2条つくりの1条突帯を貼り付け、底部はわずかに傾斜するが全体に平坦で胴部との境は緩やかに内傾する。口径55cm、器高86cm、底径13.2cm、胴部最大径59.3cm(上端より25cm付近)、突帯幅2.5cm、突帯の位置は上端から38.2cm、下端から47.8cmを測る。色調は明赤褐色で胎土に1~3mm前後の石英粒が多く含まれるが、3~4mmの茶褐色で粗い粒もまばらに見える。焼成は甘く軟質で底部及胴下部に黒斑が見受けられる。調整は内外面ともにナデにより丁寧に仕上げる。

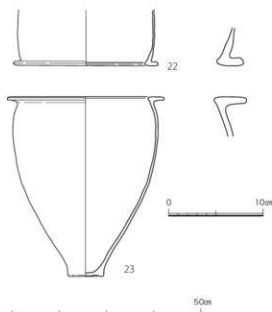
2号壺棺墓(第17図)

小児棺で単独埋葬の可能性が高い。削平により墓壙並びに上巻のほとんどと下巻の上半部を失っている。上下ともに日常的な甕を使用した接口式で緩やかに傾斜する。現存する墓壙は楕円形で規模が長さ79cm、幅44cm、深さ10cmを測る。主軸方位N-68°-W。

2号壺棺墓上巻(第18図)



第17図 第2号壘墓基平面図(1/20)



第18図 第2号壘墓実測図(1/8、口縁・突帯1/4)

口縁部は短くやや厚みのある逆L字口縁で口径30.6cm、上端が緩やかにカーブし口縁端部は丸味を帯びるが、不明瞭ながら中央の稜線が観察され内部はやや角張って突出する。胴部の張は全く直線的で器壁は薄く、内外面ともにナデにより仕上げる。色調は赤褐色で胎土に砂粒を多く含み、焼成は甘く軟質で、器の表面は風化剥落が進行する。

2号壘墓下壘(第18図)

口縁部は長くやや薄手の逆L字口縁で、上端は直線的で口縁端部はやや角張り、内部は丸味を帯びて少し突出する。肩部付近には最大径があり胴部上半部がやや張り出すもの、下半部は緩やかなカーブを描き、底部付近では垂直のラインとなる。底部は薄く底の貼り付け部分が窪んで上げ底気味となる。調整は外面にハケメを施した後丁寧にナデ消し、口縁部から内面はナデにより仕上げる。色調はふい赤褐色で胎土に砂粒を多く含み、焼成は甘く軟質で、器の表面は風化剥落が進行する。口径33.4cm、器高38.1cm、胴部最大径30.4cm、底形7.6cmを測る。

3号壘墓基(第19図)

墓塚は調査区の範囲と後世の掘削によ

り南側1/3程度を検出した。形状は隅丸長方形で南側にテラス状の平坦面が残る、そこから北側に向かって緩やかに深くなるもので、おそらく上壘側と考える。長さ1.25m以上、幅1.27m、深さ53cm以上。壘墓は全て取り出されている。

1号土壘墓(第20図)

墓塚はやや細長の隅丸長方形あるいは長楕円形で中央付近がやや幅広となる。南北両端にはテラス状平坦部が若干残るが、基本は1段掘り込みで断面形が隅丸の逆台形状を呈す。壁面から底部へのラインは緩やかな曲線状となり底部中央が若干低くなる。墓塚の規模は長さ1.56m、幅58cm、深さ15cm、頭部は南側と推定され床面から4～5cmの高さで三日月型に削り出した枕を設ける。その中央には頭部を固定するため長さ10cm、幅17cm、深さ2cm規模で半月状に窪ませており、そこに接するように折損した鉄製品を検出しており、副葬品の可能性がある。また、その他の遺物として、埋土の中から須恵器片3点が得られたが、1点のみ図化が可能である。

1号土壘墓内出土遺物(第23図)

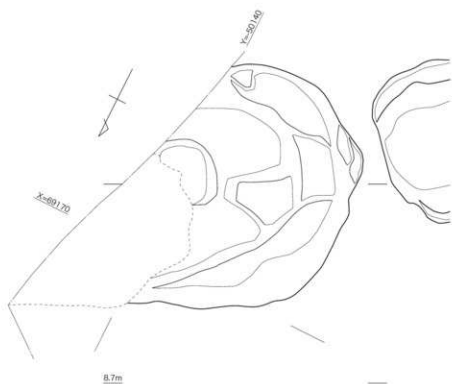
24は須恵器の蓋環で器壁厚は5～6mm、外面に回転ヘラケズリ及びナデ、内

面にナデが見られる。色調は暗灰色、胎土に砂粒を含み焼成は甘い。25扁平状鉄製品で各部位によって断面形が異なり、頭部付近は7・8mmの丸味のある鉄棒を折り曲げ細長い環状とし、頸部から脚部については6・9mmの厚みのある長方形、先端は2・8mmの扁平な長方形で尖頭状をなし、全体にピンセットを想起させる。長さ12.8cm、頭部幅1.7cm、頸部幅7mm、(脚部)中央幅9mm、同厚さ6mm、先端幅8mm、同厚さ2mmを測る。全体に負荷がかかったのか頸部が変形するようにねじ曲がり、一方の脚部は頸部付近から折損する。主軸方位N-8°-E。

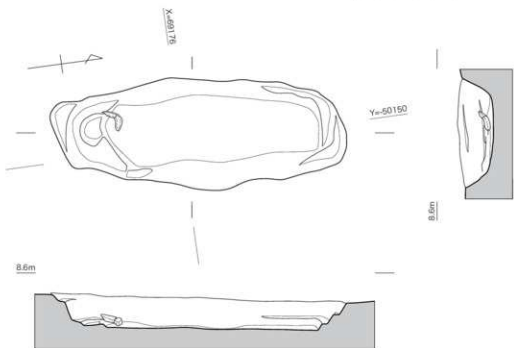
2号土壘墓(第21図)

墓塚は隅丸長方形を呈した2段掘り込みで、中央の墳も覆ね墓塚ラインに沿っており南側が幅広となる。横断面形は逆台形を呈し中央部がわずかに低くなり、縦断面形は船底状を呈し北側へと緩やかに傾斜する。墓塚の規模は長さ1.74m、幅83cm、深さ17cm、墳の面の長さ1.2m、北端部の幅38cm、南端部の幅51cm、頭部に関しては南側が幅広で、底部も北側に傾斜することから南側と推定する。主軸方位N-15°-E。

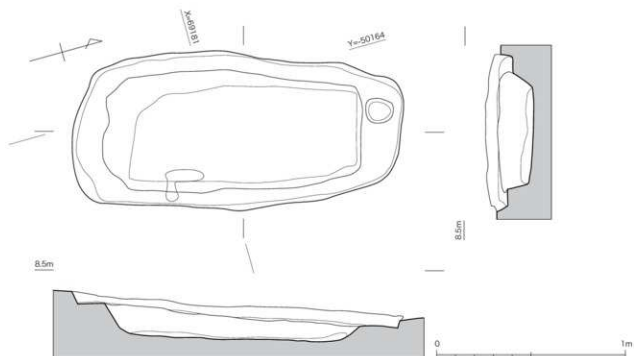
3号土壘墓(第22図)



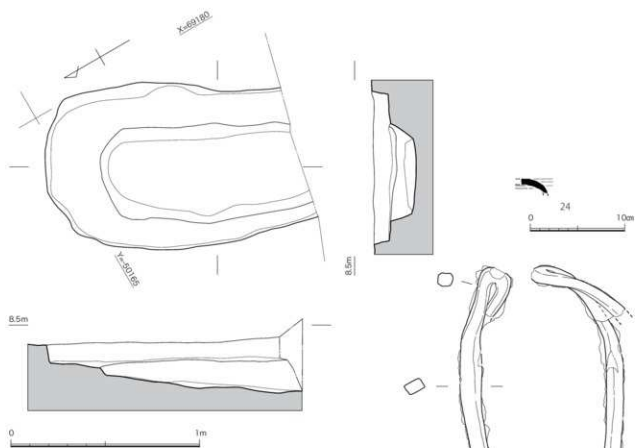
第19図 第3号墓棺基断面図(1/20)



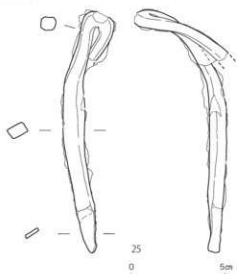
第20図 第1号土槨基断面図(1/20)



第21図 第2号土墳基平断面図(1/20)



第22図 第3号土墳基平断面図(1/20)



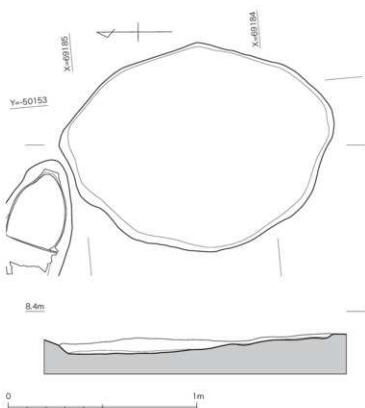
第23図 第1号土墳基遺物実測図(1/4, 1/2)

墓壇は調査区内において全体の2/3程度を検出した。平面形は長楕円形を呈した2段階掘り込みで、中央の壇も概ね墓壇ラインに沿っており東側がやや幅広に想定される。横断面形は逆台形を呈し中央部がわずかに低くなり、底部は西側へと傾斜する。墓壇の規模は現況で長さ1.36m、幅81cm、深さ23cm、壇の底部の長さ1.03m、東端部の幅41cm。頭位に関しては東側が幅広で、底部も西側に傾斜することから東側と推定する。主軸方位N-30°-E。

その他の遺構

土坑 (第24図)

平面形は楕円形を呈すが上部をかなり削られるため深さはわずか、底部は平坦であるが北側に傾斜する。規模は長さ1.4m、幅1.1m、深さ5cm。



第24図 土坑平面図(1/20)

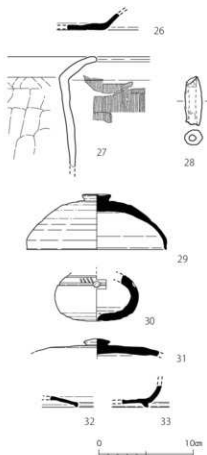
不明土壌出土遺物 (第23図)

26 須恵器皿で器壁厚4mm、色調は青灰色で胎土に石英粒を少量含むが焼成は良好。底部は回転ヘラ切の後ナデ消す。27 土師器甕で口縁部が大きく開き、口縁端部を丸く納める。頸部は強く屈折し内面に明瞭な稜線を残すが、胴部は張らずに直線的なラインを示し、調整は外面をタテハケ、内面はヘラケズリで仕上げる。器壁厚は6~8mm、色調は外面が橙色で内面は灰白色、胎土に粗い砂粒を多く含む焼成は甘く軟質。28 土錘で右側のカーブが強く最大径は中央に位置する。長さ5.2cm、幅1.7cm、色調は橙色で胎土に微砂粒を含み、焼成は甘く軟質。

ピット内出土遺物 (第25図)

29~33は須恵器、29有蓋高杯の蓋でつまみは擬宝珠状に中央がやや突出する。体部はやや甲高だがラインが急で天井部と体部は丸味をもって一体化し口縁部が直立する。口径14.8cm、器高5.9cm、天井部の器壁は厚手で1.1cm、色調は灰

色で胎土に微量の砂粒を含み焼成は良好だが断面が赤褐色に発色する。30 甕で全体に扁球形で厚みがあり肩部にある2条の沈線間に刺突文を斜位に施す。下部沈線上には穿孔途中の窪みが残る。現高4.8cm、最大径8.5cm、器壁厚は最大1cm、色調は青灰色で胎土に1~2mm前後の砂粒を少量含むが焼成は良好。底部は回転ヘラケズリを施し切り離し部分は手持ちのヘラケズリで調整、胴部は全体にナデにより仕上げる。31 杯蓋で全体にやや厚く扁平な擬宝珠のつまみを有しその上部がアーチ形となり退化傾向を示す。つまみの径2.8cm、高さ7mm、器壁厚8~9mm、色調は灰白色で胎土に石英粒を微量含む焼成はやや甘く軟質気味。32 杯蓋で稜線は明確ながらややシャープさを欠いた嘴状口縁、内面の屈折は明確で色調は青灰色胎土に砂粒を含むが焼成は良好。33 杯身で体部下方は丸味をもち底部との境は明瞭な稜線となる。高台はやや弱く幾分踏ん張るが、高さ5mm、幅6mmを測り、色調は灰白色で胎土に細かい砂粒を含むが焼成は良好。



第25図 土坑・ピット内出土遺物実測図(1/4)

おわりに

[弥生墳墓群]：1次調査で確認された1号・6号墳墓の北東に木棺墓2基と土壇墓1基を確認。さらに延びて列を成すものと推定する。今回検出された1号墳墓は主軸方位こそ前回の1号と一致するが、距離的に離れており単独埋葬と捉えている。現状では調査区北側の小児墳墓1基が単独、調査区西側の土壇墓2基は形状等から弥生墳墓と想定するが列埋葬には至らない感があり、領域を共有しつつも4つのグループに分かれ、中心をなす主グループに近い立場でありながら列に納まらない1号墳墓、北側と西側に離れて墳墓を築く2グループの存在は、この地を墓区と定めた複数集落の存在と中心グループ、それに近い関係のグループI、やや遠い2つのグループの存在が想定されようか。所屬時期：1号墳墓＝橋口編年³⁷K II C（汲田式）・弥生中期前半、2号墳墓＝須玖1式新へ2式古段階³⁸の日常土器を使用。

[古墳時代の遺構]：2号溝は径19m程の半円状をなし幅26～40cm、深さ15～25cm、底部の所々に1.6～1.8mの間隔でピットが掘り込まれる。溝の内側から得られた須恵器の坏(17)は6世紀末から7世紀初頭の時期を示しており、同じく溝内に廃棄されていた赤埴土器の壺(18)も同時期のものとして矛盾はない。遺構の性質としては西側が傾平されているように不明ながら、不規則だが溝内のピット群を支柱と捉えそれが環状に広く囲っていたと想像するならばどうであろうか。上下に横木を取り付けていけば柵状の構造物となり馬など家畜動物の飼育も考えられる。

当遺跡の東側に隣接する内橋登り遺跡³⁹では、4か所について発掘が実施されているが、第1地点のSD-10は第4地点で西側の残りが検出されており、北側に隅丸状のコーナーが確認できるが南側は傾平であろうか途切れている。遺物は須恵器と赤埴土器が得られており、様相は本遺跡の2号溝に近い。SD-5は北側に位置し北側にカーブするようSD-10と対称的な位置にあって同様の形状を呈すと考えられる。須恵器、土師器、赤埴土器が得られている。ともに、6世紀末前後の時期と考えられ、鏡遺跡を含めて3つの柵状構造物が存

在しそうである。また、第1地点で確認されている同時期と推定される掘立柱建物も含めて考察する必要がある。

1号土壇墓は溝状遺構の北側に位置し6世紀後半から7世紀代前半頃に比定されよう。麻子状鉄製品(23)が検出されたが、これを馬具の轡の引手金具⁴⁰とするなら、土壇墓内には一対として2個存在する引手金具の一方が、折損した形で納められていたことになる。墓域北側は傾り出しの枕が設けられ頭部を固定するような窪みまで掘り込まれており、そこには被葬者の頭部が位置していたとすれば左側の顔面から顔あたりに接して金具が置かれたことになる。その場合、折損した引手金具1点のみを頭部横に置くという不可解な事象ではある。そこで、馬のものかあるいはその頭部が埋葬されていたという可能性はないか、何かの負荷により轡が引きちぎれ、折損した片方の引手が残った状態のまま埋葬したと考えることも可能か。また、当墳墓が単独埋葬という点において、集団墓を基本とする人の埋葬とは異質で気になる点である。

[古代の遺構]：堅穴建物は居住空間から離れた場所に単独で存在し、規模が一辺2m余り床面積5㎡程の小規模な建物で住居の形態⁴¹を示すががやカマドは存在しない。柱は中央とその四方に位置し四主柱は2連1組で中央柱付近に赤色塗料が存在する。構造上各柱間にスペースが4か所、各々約1㎡の面積で大人4人が座して対面する程度の狭小なもの、遺物は概ね飲食関連の土器で、所屬時期は7世紀末から8世紀初頭頃。

まとめると①7世紀末から8世紀初頭頃の居住領域から離れた1軒屋。②同建物は就寝に向かず継続的使用を行わなかった。③使用上寒暖は無関係。④室内で煮炊きはしないが飲食物は持ち込む。⑤邪気が払われる、という特殊な用途の建物であったと考えられる。

掘立柱建物は調査区南東側において柱間は7尺で統一された状況を示し梁行長14尺の2間、桁行長21尺の3間の建物と推定。棟方位は正方位を示し遺物等から8世紀末～9世紀初頭頃のもの、当遺跡の東200～300mの範囲に位置する内橋坪見遺跡⁴²の建物群等が正方位に変化するのが8世紀後半であり、今回の建物の方位や時期は整合する。

また、建物が存在する一角は古代にお

ける居住空間の北西限界域を示すと考えられ、おそらく、中心(駅家)と周囲の建物群(雑合)から構成される中で、その西側への広がりがもたらされておる。建物の周囲に集中する柱穴群はある境界をもってそこから先は急になくなるという光景が見られる。境界線なるものが何であるか、境界線は果たして細大な視覚的なもので区切られているのか、残念ながら把握出来ていない。なお、西側に関しては内橋登り上り遺跡⁴³東側に同じく内橋牛切遺跡⁴⁴をもつてその様相を捉えることが可能であろう。

註

- 1 橋口達也 2005『3遺構の編年の研究』『豊橋と弥生時代年代論』雄山閣
- 2 武末純一 1987「1,須玖式土器」『弥生文化の研究』4 弥生土器II 雄山閣
- 3 粕屋町教育委員会 1994『内橋登り上り遺跡』粕屋町文化財調査報告書第8集 同 1997『内橋登り上り遺跡』第2地点 粕屋町文化財調査報告書第11集 同 1997『内橋登り上り遺跡』第3地点 粕屋町文化財調査報告書第12集 同 2001『内橋登り上り遺跡』第4地点 粕屋町文化財調査報告書第17集
- 4 橋口達也 1989『6馬具』『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集 福岡市教育委員会
- 5 石野博信 1990『第1章古代日本の住居』『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館
- 6 粕屋町教育委員会 2013『内橋坪見遺跡概要報告書』粕屋町文化財調査報告書第35集
- 7 粕屋町教育委員会 2015『内橋坪見遺跡3次』粕屋町文化財調査報告書第38集
- 8 粕屋町教育委員会 2015『内橋遺跡』粕屋町文化財調査報告書第37集
- 9 註3と同じ
- 10 粕屋町教育委員会 2013『内橋牛切遺跡』粕屋町文化財調査報告書第36集

参考文献

- 大野城市教育委員会 2008『牛頭宗跡群一総括報告書1ー』大野城市文化財調査報告書第77集
- 九州歴史資料館 2002『大宰府政庁跡』九州歴史資料館 2013『大宰府政庁跡 官衙跡Ⅳー不丁地区 遺物編1ー』九州歴史資料館 2014『大宰府政庁跡 官衙跡Ⅴー不丁地区 遺物編2ー』

内橋カラヤ遺跡

墳丘が削平され地中に埋没していた前期前方後円墳の発見に至った。この前方後円墳を内橋カラヤ古墳と呼称する。

調査概要

古墳時代前期の前方後円墳1基、方形周溝墓1基、古墳時代後期の竪穴建物1軒、時期不明の掘立建物1棟、性格不明の遺構1基を検出した。

前方後円墳（内橋カラヤ古墳）

調査区西端において前方後円墳の前方部先端部のみが検出された。墳丘は後世の削平によってすでに失われ、その大半が調査区西側を南北に走る県道福岡環状線の下になっており、墳丘内や周溝のコーナー付近は立木の根によってもかなり埋されていた。

墳丘部の平面形は方形を基本とするが、南北両側向から後円部方向へのラインがやや内傾するためバチ形の前方部を想起させ、全体の復元形は戸原王塚古墳（船形町）²¹に近いと考えられる。墳丘の周囲を囲む周溝のコーナー部分は隅丸状を呈す。北側コーナーは南北と東西の周溝が交わるあたりが浅く途切れて陸橋が設けられ、その位置は前方部から後円部に向かって右側となり、左側となる戸原王塚古墳とは反対となる。前方部の南北両側の周溝は南側が幅広く浅いが、北側は幅広く深い。また前方部東側の周溝部分は幅広く中央付近が最も深く、南北両側の隅角付近に向かって緩やかに浅くなる。また、そこは前方部正面に相当し中央部の外側ラインが緩やかな外カーブを描いて最大幅を示す。

前方部（隅角付近）幅：上端10.3m、

下端11m、周溝幅を含めると最大幅14.74m×15m、南側周溝幅：上端1.84m、下端1.4m、深さ42cm、北側周溝幅：上端2.6m、下端1.8m、深さ55cm、東側周溝幅（中央付近）：上端2.84m、下端2.06m、深さ64cmを測る。

現状として調査区全体は削平されているが、南北両側で周溝上端部の外側ラインの高さを比べると比高差が約30cmあり、遺構検出面は南から北側に向かって緩やかに傾斜することがわかる。次に、両周溝の基底部の比高差を測ると約40cmであり、先の比高差と10cmの差はあるものの傾斜度に大きな変化がないことから、削平は及ぶが旧地形の傾斜度を概ね保っていると判断される。ただし、周溝の幅員の差は74cmと広いことから周溝全体の掘削量に関しては南北の差は大きいと言えよう。これは、墳丘の北側に展開する低地と多々良川を意識しつつも、築造上見えない部分に手抜きのな仕事を行う所謂「見せかけの作り」とも言えようか、この点では戸原王塚古墳も同様に墳丘の北側に展開する低地を意識した「見せかけの作り」的な一面が見えており興味深い。また、前方部東側の周溝形態は、当時の古墳に対するある種正面観的な現れともとれる印象を与える。なお、前方部幅の上端10.3m、下端11mという規模から全長は28m程度と推測される。

陸橋部（第2図）

長さ1.1m、上端の幅80cm、下端の幅1.1mを測り、東側外方より橋上部検出面が数センチ低いことから、陸橋上部

は外方と墳丘間において逆アーチ状に窪んだ上面構造の可能性があり、外方より墳丘側が幅広くなるものでその中央付近が墳丘北側の隅角と一致する。さらに、陸橋両側縁が周溝部と接するあたりの北側と東側にはそれぞれ三角翼状のテラスが設けられている。南側のものは根の覆乱により判然としませんが、おそらく北側と同形と思われ、ともに墳丘側に接していることから、周溝内での昇り降りの際に使用するためのステップを設けたものか。

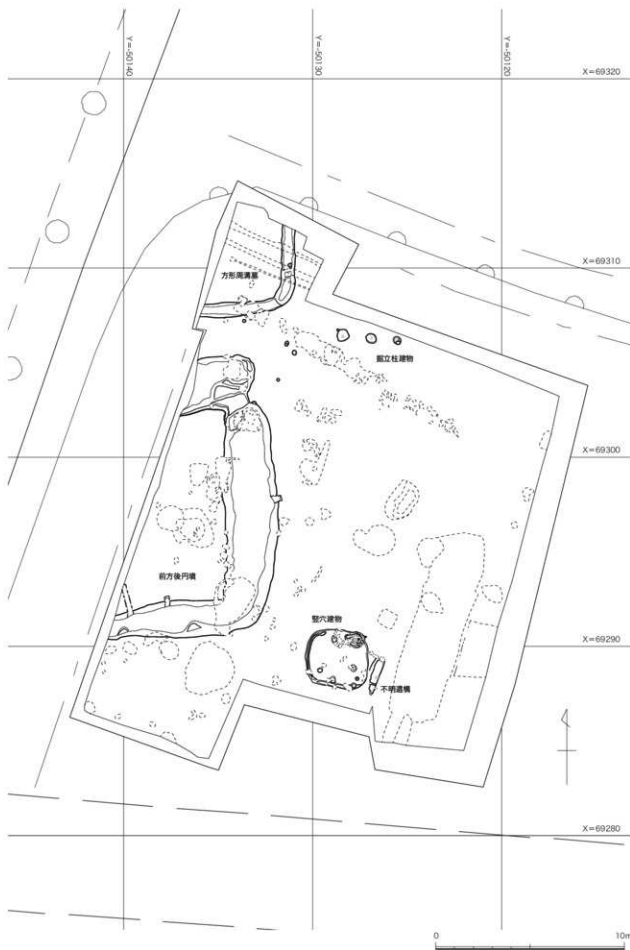
周溝内の土層については南北2か所と東1か所の計3か所で確認を行っており、南、東、北の順で検討を加える。

南側周溝土層図（第3図）

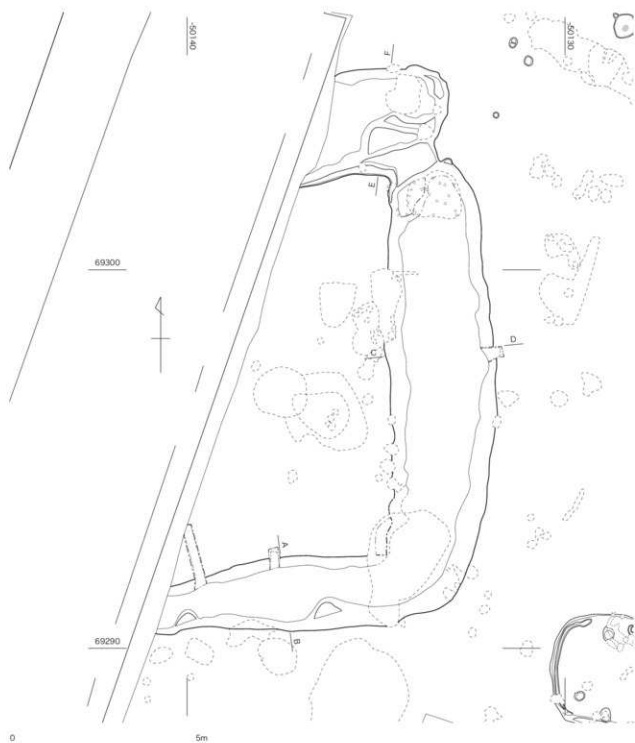
大まかな堆積順序は9・10層→8層（a・b・c）→7層→4・5・6層→2・3層→1層（黒ボク状の黒色土）の順となる。①傾斜度の高い外方からの堆積（周溝壁面の崩落）。②外方と墳丘の両側から堆積（墳丘崩落開始）。③外方からの堆積は急（周溝壁面の崩落の進行）。④外方は落ち着くが墳丘側は崩落の進行。⑤周溝内に黒ボク状の黒色土が堆積する。この層が形成されるまでに概ね4段階の土壌堆積（厚さ約30cm）が認められる。その後、周溝が完全に埋没すると想定されるが上層は削平されて消失する。

東側周溝土層図（第3図）

大まかな堆積順序は10・11層→7・8・9層→6層→5層（黒ボク状の黒色土）→1・2・3・4層の順となる。①外方から底部全体に徐々に堆積。②外方と



第1図 内堀カラヤ遺跡全体図(1/200)



第2図 前方後円墳平面図 (1/100)

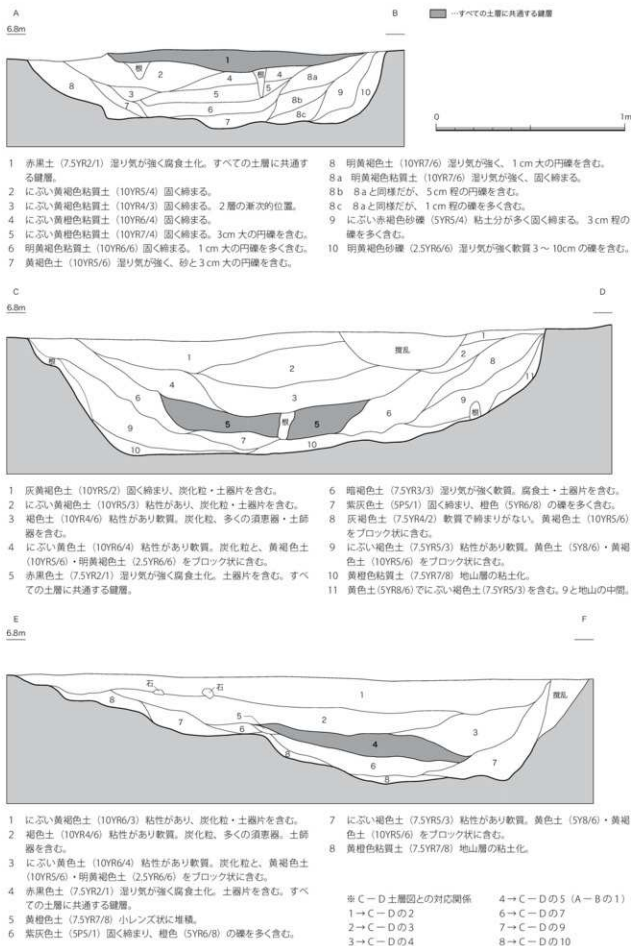
墳丘の両側から堆積（墳丘及び周溝壁面の崩落土か）。③外方と墳丘の両側から堆積が続く（墳丘及び周溝壁面の崩落が進行）。④周溝内に黒ボク状の黒色土が堆積する。⑤両側からの堆積が進行して周溝が完全に埋没する。この層が堆積するまでに底部には10cm程度の堆積しか見られない。東西両壁面側は同程度の量ではあるがかなり厚く堆積が進行する。

中央部は堆積が進まず両側の厚い堆積が壁面状となり溝のような窪みをつくり、そこに黒ボク状の黒色土が堆積する。その後、堆積が進行して周溝は埋没するが、当初から墳丘や周溝の壁面崩落を含む堆積は東西同時進行で、それが埋没時まで継続する。

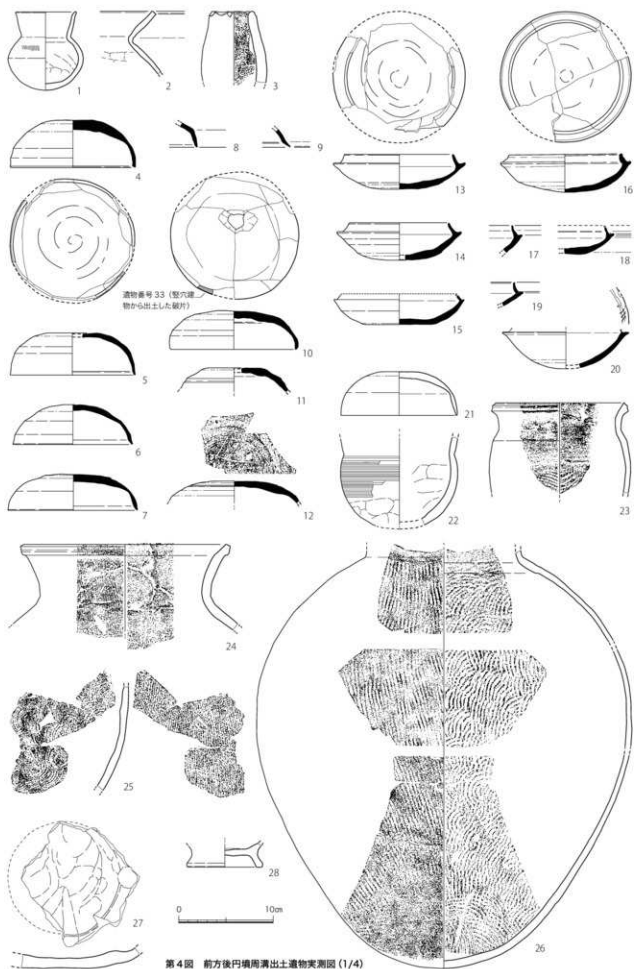
北側周溝土層図 (第3図)

大まかな堆積順序は8層→7層→6層→4層（黒ボク状の黒色土）→3層→1・2層の順となる。

①墳丘側から底部の窪み部分を埋めるように浅く堆積。②主に外方壁面の崩落か。③墳丘側から底部中央を覆うように堆積（墳丘崩落か）。④周溝内に黒ボク



第3図 前方後円墳周囲溝土層平面図(1/20)



第4図 前方後円墳周溝出土遺物実測図(1/4)

状の黒色土が堆積する。⑤再び外方壁面の崩落が、⑥両側からの堆積が進んで周溝が完全に埋没する。周溝内に黒ボク状の黒色土が堆積するまでに底部には15cm程度の堆積しか見られず東側周溝と違い、堆積状況は当初墳丘部から始まり、その後は外方と墳丘部から交互に繰り返されるようである。

以上は土層観察結果であるが、注目すべき点として周溝内に黒ボク状の黒色土が堆積している点である。土色は7.5R2/1赤黒色で非常にきの細かく、湿気を多く含むものの、乾燥するとカチカチに固まる。全体に植物の腐葉土に近いが色調はかなり黒くて異なる。衣服に付着すると墨のようなシミとなるもので、過去に観察した黒色土とは異なり火山地帯の土層に堆積する漆黒の土層を思わせる。当初は周溝が渾濁になった時点で周囲の植物等が堆積し変化した土層と解釈したが、先の理由と後述する方形周溝墓にも全く同じ土層が見られ、条件が異なる別々の遺構内で全く同じ土層は形成されないと考えられる点において、カラヤ遺跡及びその周辺で形成された土層が堆積したものと解釈をしている。この土層はススキ等のイネ科草本草原に由来するもので、人為的な草原管理が行われていた可能性から馬飼いとの間連²⁾が考えられる。

周溝内出土遺物 (第4図)

周溝内の遺物出土状況を観察すると、平面的には東側ベルト付近と北側ベルト付近集中しており、層位的には東側ベルトの土層(第3図参照)で確認すると、黒ボク状の黒色土が堆積する5層の上面に土器が集中している。これは周溝が埋没する過程で墳丘や周溝壁面の崩落を伴う堆積が納まる一定期間、そこに水が溜まった状態で渾濁となり黒色土が堆積するが、おそらく、周溝全体が渾濁の状態であった時に投入されたものであろう。遺物は特に須恵器環が目につくが破片も含め概ね固まった状態で検出されており、ある程度意識的なものと考えられる。古墳の築造時期を示す遺物は、7層内及び10層上面から検出されており、下層の遺物とは明確に区分される。1-3が上層、4-27は上層より検出されたものである。

1・2土器器、1小丸丸形蓋、7扁球形

胴部の最大径はやや上部に位置し底部は尖底気味の丸底、口縁部はやや開き気味となる。調整は外面のハケメをほぼナデ消し内面はユビナデで仕上げる。口径6.4cm、器高8.3cm、胴部の器壁厚5-7mmで厚いつくり。色調は明褐色で胎土に砂粒を少量含み、焼成は甘く軟質。2甕で口縁端部は角張り中央が凹面を呈す。短めの口縁部は内湾気味に開き、くの字状の頸部はオサエが甘く内側の屈曲が緩やかとなる。調整は内面のヘラズリが下方に下がり口縁部はナデ、頸部以下にはナデとハケメが施される。胴部器壁厚4-5mmと若干の厚みを持ち、色調はにぶい黄褐色で胎土と焼成は良好。3飯蓋器形土器で形状は焼成後のコップ形、口縁部は1ヶ所にキザミ状の窪みが見られ全体にクラックが入る。口径3cm、現高7.5cm、器壁厚1cmと厚手。調整は外面にユビナデが施され、内面は横位の丁寧なユビナデで仕上げる。色調は黄褐色で胎土が精良、焼成はやや甘く軟質気味、4-20須恵器、4杯蓋で天井部が厚く口縁部内面に段が残る。口径13.2cm、器高5cm、天井部の器壁厚1.1cm。調整は外面を回転ヘラズリとナデ、内面はナデで仕上げる。色調は上部が灰オリーブ色で下部はにぶい赤褐色を呈し、胎土に粗い砂粒を多く含む。焼成は不良で下半から口縁部が酸化する。口縁部のみ細かく破損しているが、観察の結果反時計回りに順次打ち欠き、円周の半分近くが失われていると判明、人為的な行為の結果と判断した。5杯蓋で口縁部内面にやや明瞭な段が残る。口径13.2cm、器高4.4cm、調整は外面を回転ヘラズリとナデ、内面はナデで仕上げる。色調は灰色で胎土に粗い石英粒を微量に含み、焼成はやや甘く全体に表面がざつろつ。6杯蓋で口縁部内面に段状の稜線が残る。口径12.6cm、器高4.2cm、調整は器面が荒れ外面に不明瞭ながらヘラズリの稜線が残る。色調は淡黄色で胎土に少し砂粒を含むが精良、焼成は不良で軟質の生焼けと称される状態。7杯蓋で口縁部内面にわずかに稜線が残る。口径13.6cm、器高3.8cm、色調は淡黄色で胎土に微砂粒を含むが精良、焼成は不良で6と同様軟質の生焼けと称される状態。8杯蓋で口縁部内面にわずかに段が残る、口縁部と体部の境が折し稜線となる。色調は暗青灰色で胎土に粗い砂粒を含み、焼成は良いが内

面が赤褐色。同一個体の破片が後述する竪穴建物内から出土。9杯蓋で外反する口縁部内面にわずかに段が残る器壁厚4mmの薄手で良品、色調は褐色で胎土は精良、焼成は良いが断面がにぶい褐色。10杯蓋で天井部が厚く口縁部は丸味をもち内面は緩やかで曲線のみ。口径13.2cm、器高4.1cm、天井部の器壁厚1cm、調整は外面を回転ヘラズリとナデ、内面をナデで仕上げる。色調は青灰色で胎土に粗い石英粒を微量含むが焼成は良好。内面天井部から外面に向け間接的打撃をもって直径1.5cmほどの孔を穿ち、体部はそこから3方向に大きく割れる。口縁部は図前方の一部と後方が大きく欠損するが両側面は接合して残存し、欠損部と残存部はそれぞれ向き合うこととなる。また、接合部の口縁部左右対称の位置に微再剥離が認められ、穿孔による破壊が微再剥離など人為的な結果と判断した。なお、図前方の接合破片は後述する竪穴建物床面検出のもので重要。11杯蓋で天井部側面に沈降後の段をもち、調整は外面を回転ヘラズリとナデ、内面をナデで仕上げる。色調はにぶい黄褐色で胎土に粗い砂粒を含むが焼成は良好。12杯蓋で天井部平坦面の外側に幅1mm程度の沈降の跡がある。色調は青灰色で胎土に砂粒を微量含むが焼成は良好。ヘラ記号をもつ。13杯身で内縮する立ち上り内面の段は消し、屈曲面はラインを描く。口径11.6cm、受部径14cm、器高3.6cm、調整は外面を回転ヘラズリとナデ、内面はナデで仕上げる。色調はオリーブ灰色で胎土に粗い石英粒を含み、焼成は良いが断面は赤褐色を呈す。底部周囲全体が破損するものの、図の左右部分が接合し前後は欠損する。連続的な打ち欠きこそ観察されないが、破損部と残存部はそれぞれ向き合っており、長さも同じくらいでシメトリ的な関係を示すことから人為的な行為の結果と判断した。14杯身で立ち上りは内縮し内面が屈曲する。口径10.6cm、受部径13.2cm、器高3.9cm、底部器壁厚9mmとやや厚く、調整は外面を回転ヘラズリとナデ、内面はナデで仕上げる。色調は灰色で胎土に粗い砂粒を含み、焼成は良いが断面ににぶい赤褐色を呈す。15杯身で立ち上りは内縮し内面の屈曲がラインを描き、受部は短い。受部径13.8cm、現高3.1cm、調整は外面を回転ヘラズリとナデ、内面はナデで仕上げる。色調は灰褐色で

微砂粒を多く含むため表面がざらつき、焼成はやや甘く軟質気味。16 坏身で立ち上りは 9mm と低く厚手で受部も短い。口径 12cm、受部径 13.8cm、調整は外面を回転ヘラケズリとナデ、内面はナデで仕上げる。色調は灰色で胎土に粗い砂粒を含むが焼成は良好。底部も含め全体が破損するもの大半は接合する。連続的な打ち欠きこそ観察されないが、13 と同様に欠損部と残存部はそれぞれ向き合っており、長さも同じくらいでシメトリ的な関係を示しており人為的行為の結果と判断した。17 坏身で立ち上りは屈折し端部が直立気味となり受部は直線的で平坦。内面の屈曲は緩やかで不明瞭ながらもラインを描く。18 坏身で立ち上がりは内傾し受部との境が窪む。内面は湾曲して緩やか。19 坏身で外反気味の立ち上がりは端部が直立する。立ち上がりと体部の接合が明瞭で内面が逆くの字状に屈折し明瞭なラインを描く。20 坏身で全体に整ったつくりで体部のラインは半円を描くように湾曲し器壁厚もば変化しない。受部は直線的で立ち上がりとの接点のみわずかに窪む。立ち上がりは破損するが残存部は薄いつくりで内傾する。受部径 13.4cm、現高 3.9cm、色調は褐色気味で胎土に微量の砂粒を含み、焼成は良好だが断面にはぶい色を見す。調整は外面が荒れ肥厚は困難だが底部は回転ヘラケズリをナデ滑し、内面はナデで仕上げる。立ち上がりは破損部分を観察すると、内側からつけられた傷のような浅い溝が 4~7mm の長さで確認できる。溝は細く鋭利なラインでのみ状の金属の鋭い先端を立ち上がりの内側にあてがい、落り屑とした状態で「はつり」に近く人為的行為の結果と判断した。つくりや色、胎土、焼成等の特徴から 9 の坏蓋とセットになると考えられる良品である。21~26 赤褐色土器 21 坏身で技法は須恵器ながら焼成や色調、質感等は土師器で、橋口氏の分類³⁾では似非須恵土師器となる。全体に丸味をもちやや小ぶりで器が高く、口縁部がシャープなつくりである。口径 12.3cm、器高 4.6cm、色調は赤褐色で胎土に 4mm の細礫状の土器片⁴⁾を含み、焼成は甘く軟質。調整は内外面ともに器面が荒れ肥厚が困難だが、回転ヘラケズリを思わせる種藪が一部に残る。22 厚手 9、コーナーの長直垂、外反気味の口縁部は体部との境に段を有し、内面は緩やかな屈曲ラインを示す。

頸部径 11.8cm、胴部最大径 12.4cm、体部の器壁厚 7~8mm、調整は体部にカキメを施し底部は手持ちのヘラケズリ、内面は横位のヘラケズリで仕上げる。色調は褐色で胎土に粗い砂粒を含み、焼成は甘く軟質。23 小型甕で外反する口縁部は須恵器と同様にシャープなつくり、肩部から胴部は直線である。口径 13.6cm、色調は赤褐色で胎土に微量の砂粒を含むが、焼成は良い。調整は口縁部内外両面をナデ、胴部はタタキで仕上げる。24 甕で外反する口縁部は須恵器と同様なつくり、頸部は湾曲する。口径 12.2cm、色調は赤褐色で胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや甘く軟質気味。調整は外面にカキメ、内面にはタタキの当具痕が残る。25 甕で色調にはぶい褐色、外面にタタキメ、内面には同心円状の当具痕が残る。同一個体の破片が後述する竈穴建物内から出土。26 甕で肩部、胴部、底部の破片より復元、胴部最大径 39.6cm、推定の現高 42.5cm、色調は明赤褐色からぶい赤褐色で胎土に微量の砂粒を含み、焼成は甘く軟質。調整はタタキが施されるが底部はナデ消される。破片は概ね周溝の北側ベルト付近で検出されたが、底部の一部は東側ベルト付近で得られるので、一部破片の人為的移動が観察される。27 土師器の把手付鍋か、平坦な底部で底径 12cm、器壁厚 1~1.4cm、色調にはぶい褐色で胎土に砂粒及び 7mm ~ 1cm の細礫が含まれ、焼成は甘い。調整は内面にユビナデの痕が明瞭に残る。28 土師器の坏で遺構検出面の屋上層で出土、高台が高く丸味のある端部が外方に張り出す。底径 8cm、高台高 1.4cm、高台の器壁厚 7mm、色調は明褐色で胎土に微砂粒をわずかに含み、焼成は甘く軟質。

方形周溝墓 (第 5 図)

前方後円墳のすぐ北側に位置しており、両者は南北に並列し間隔はわずかに 2m と接近する。墳丘部はすでに削平により失われ、調査区の間隔により南東部コーナー部分のみが検出された。周溝は断面形が逆台形を示し、コーナーを境に西側に 4.7m、北側に 3.6m の部分が検出され、幅 70 ~ 80cm、深さは南側で

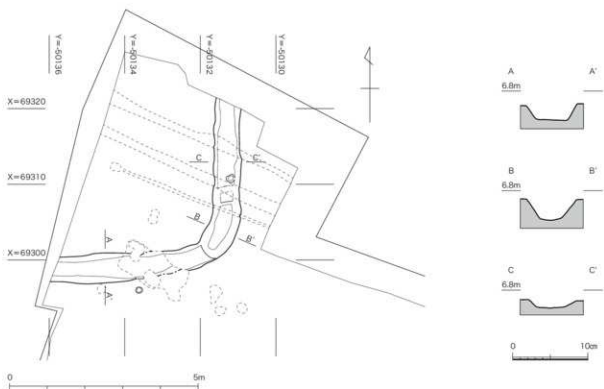
26cm、北側で 15cm、コーナー部分のみ 35cm と深い。遺物は検出されず周溝内には古墳周溝と全く同様の黒色土が堆積しており、古墳の周溝とともに空堀状態が継続していた事実と堆積しているのは黒ボク状の黒色土と考える。

竈穴建物 (第 6 図)

平面形は隅丸の正方形で方形プランを呈し、竈穴の西側には一辺のみ周壁溝が存在する。床面は貼床と考えられ、断面 (第 6 図) を観察すると南北ラインは不明瞭であるが、東西は西側周壁溝の内側壁面から中央を経て東側壁面下に至る間を 10 ~ 16cm の深さで 1 段下げ灰黄褐色の粘質土を貼つて南北ラインを形成する褐色と黄色の粘質土を小ブロック、あるいは碇形状に配合した人工的なもので、床面中央からカマド付近は硬くもたまっている。ただし、全体が小さく壁面も緩傾斜で握り込まれるため通常より脆弱な印象を受ける。規模は長軸長 (東西) 3.42m、短軸長 (南北) 3.04m、深さ 14cm、床面幅は約 10.4m で小型を示すが、全面に木の根の擾乱が入り柱穴やカマドの検出に支障をきたしている。北東コーナー部分には根の擾乱が著しいが左袖部が発達する片袖的なカマド (第 6 図) が設置され、左袖は壁面に接しているが、右袖は壁面から 40cm 以上離れており、長さ 1.07m、幅 75cm を測り、建物に比べ大型でしっかりしたものとなっている。構造は厚めの貼床を底部とし、両袖部は下にぶい赤褐色粘質土、上部に明黄褐色粘質土を重ねた二段構造で自然石の支脚を据える。煙道は短く中央付近の焼土部分が燃焼部であろうが、焚口付近は擾乱のため不明。

竈穴建物出土遺物 (第 7 図)

29 ~ 36 須恵器、29 坏で口縁端部は厚めで丸味があり内面の段は見られず、天井部と体部の境界に細い沈陥が付される。口径 12.8cm、器高 3.9cm、器壁厚 4 ~ 5mm、調整は天井部を回転ヘラケズリ、口縁部外面と内面全体についてはナデで仕上げる。色調は灰白色で胎土に 1 ~ 2mm の砂粒が含まれるが焼成は良好。



第5図 方形周溝墓平面断面図 (1/100、1/50)

30 坯蓋でカマド右袖の粘土に塗り込められた状態で検出、資料 29 の口縁部に接合する。諸特徴は 29 に記すが天井部から口縁部にかけ縦にヘラによる短線が付されている。資料全体はおおよそ半々に分割され平面図の上方はさらに細かく割れ口縁部が一部欠損する。観察すると口縁部は初めに資料 30 を打ち欠き反時計回りに 3 片を割取る。次に 30 をカマドの右袖に塗り込め、残る 3 片中の 1 片を残してどこかに持ち出している状況が窺え、人為的破損と移動行為が読み取れよう。31 坯蓋で口縁部は直線的に傾斜し端部の内側に不明瞭ながら段状の稜線が起る。天井部と口縁部の境界付近には強く屈曲し外面に稜線が見られる。口径 13cm、器高 3.9cm、調整は天井部を回転ヘラケズリ、口縁部外面と内面全体についてはナデで仕上げる。色調は灰色で胎土に粗めの石英粒を含み、焼成は良いものの断面がぶい赤褐色を呈す。なお、古墳周溝内出土の資料 8 とは接合こそしないが同一個体であり、人為的破損と移動行為が読み取れよう。32 坯蓋で口縁端部内側がわずかに段をなし、口径 13.2cm を測る。色調は暗赤灰色で胎土に砂粒を少量含み、焼成は良いが断面

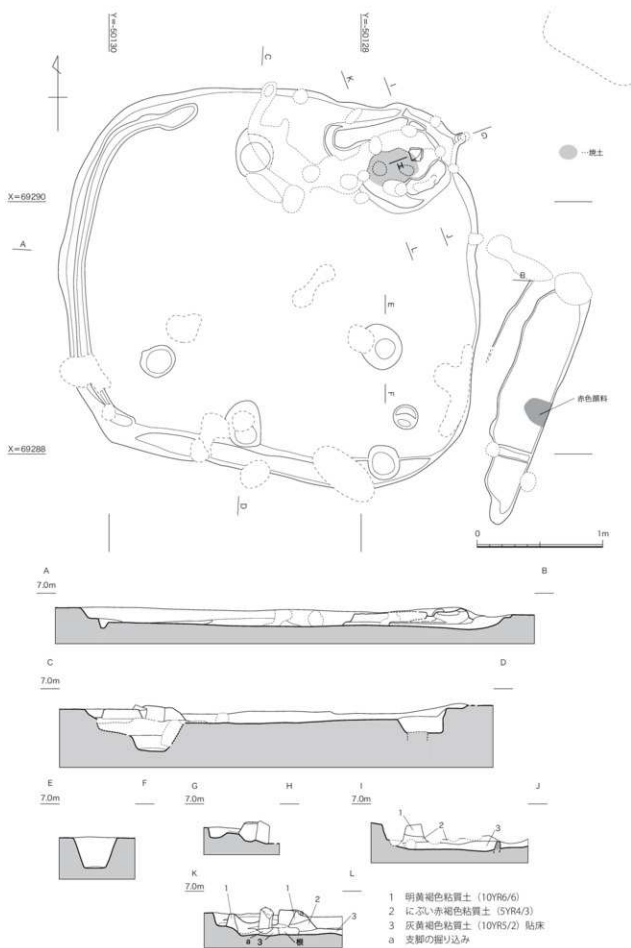
がぶい赤褐色、内外両面ともにナデで仕上げる。33 坯蓋で資料 10 の口縁部に接合する。34 坯身で立ち上がり部を欠くが、内面の屈曲は強く沈線状にラインを描く。受部径 14cm、現高 3.2cm、調整は底部を回転ヘラケズリ、体部外面から内面全体をナデで仕上げる。色調は青灰色で胎土に細かい砂粒を少量含み、焼成は良いが断面が暗赤褐色を呈す。35 坯身で立ち上がりは直立し受部も長く、体部のラインは直線的で内面の屈曲も強い。口径 11.5cm、受部径 13.6cm、立ち上がり高 1.4cm、調整は内外両面ともナデにより仕上げる。色調は暗灰色で胎土に細かい砂粒を含むが焼成は良好。36 坯身で体部のラインは丸味をもち内面の屈曲も弱い。口径 11.2cm、受部径 13.2cm、調整は内外両面ともナデにより仕上げる。色調は灰白色で胎土に微砂粒を含むが焼成は良好。37 赤焼土器の甕で古墳周溝内出土の資料 25 と接合こそないが同一個体であり人為的移動行為が読み取れよう。

掘立柱建物 (第 8 図)

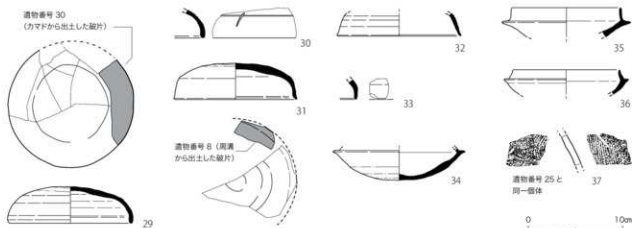
調査区北側に位置しており 2x? 間の南北棟で N-4°-E の棟方位をとる。柱間は梁行側 1.46m・1.3m、梁行長 9 尺の 2.76m、柱穴は径 42~60cm の円形で深さ 16~24cm を測る。

不明遺構 (第 9 図)

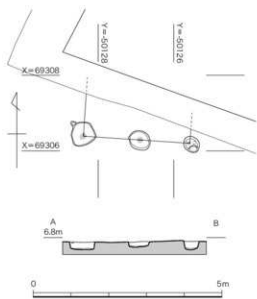
調査区南側にあって竪穴建物の東に隣接する。これ自体は激しく削平されており輪郭も不明であるが、中央付近に赤色顔料の集中部分が存在するため不明ながら遺構と捉えた。平面形は長方形を呈すが北側は木の根による擾乱で不明、南側は削平により消滅している。東側は 1 段掘り込みで直線的なラインを描きつつ 2 段掘り込みの様相を呈す。西側は外湾気味に不規則な曲線を描きつつ 2 段掘り込みの様相を呈す。南側は 9cm、深さ 6cm の溝状に掘り込まれ木棺蓋の木口状をなす。隣接する竪穴建物とは一部切り合うようであるが、削



第6図 竪穴建物平断面図(1/30)



第7図 竪穴建物出土遺物実測図(1/4)

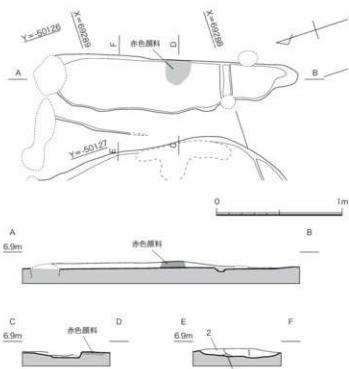


第8図 竪立柱建物平面断面図(1/100)

平のため不明瞭で断定は出来ないが建物に切られているようである。規模は長さ1.9m、幅57cm、深さ6cm。赤色顔料は径20cm弱の円形状を呈す。

不明遺構出土遺物(第10図)

38小片で判別が困難であるが須恵器製の胴部片か、器壁厚7~8mmで赤色顔料の近くにあったため、内外両面ともに部分的にはあるが顔料の付着が見られる。調整は外面にカキメ、内面にはわずかに浅く当具痕が残る。色調は黒色で何かが付着した感じであり、内面は黒褐色を呈す。



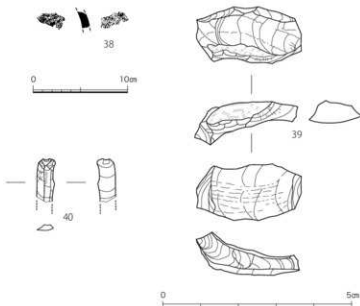
第9図 不明遺構平面断面図(1/30)

- 1 黄褐色土(2.5YR5/3)。炭化粒及び黄色土粒(2.5YR8/6)を含む。
- 2 暗灰褐色土(2.5YR5/2)。明黄褐色土ブロック(10YR6/6)を含む。
- 3 明黄褐色土ブロック(10YR6/6)。

その他の遺物(第10図)

提示する2点ともに黒曜石製で細石器関連のものと考えられる。当遺跡は藤栗町若杉山系から西に延びる丘陵の北側において、枝状に分岐して小さな半島状を呈すが、本来、低丘陵であるがかなり低いにもかかわらず多々良川の影響が強く、

左岸に形成された一連の低位段丘に相当しよう。39は地山最上層に堆積する10YR5/8黄褐色の細粒土層(レス層)中に含まれていたもので、北側に向かって緩やかに傾斜する地形のためか、南側の堆積は数cmと薄く疎らに見られる程度であるが、北側はやや厚くなり10cm程度が残っており、当資料も調査区北端から検出された。また、40は古墳周



第10図 不明遺構・その他の出土遺物実測図(1/4、石器 1/1)

溝内の堆積土中で流れ込みと考えられるが、やはり北側である。

39 細石核の打面調整剥片(スキー状スポール)でプランクの上面を剥がして打面を形成させる際の2番目に相当する調整剥片である。打撃は図の右側より与えられ末端がスキーの先端状にカーブする。全長2.8cm、幅1.5cm、厚さ6mm。

40 細石刀で両側縁及び表面2条の後縁は平行で断面は台形を呈し、頭部の3ヶ所に細かな打面調整痕が見られる。末端は中途の截断により失われている。全長1.1cm、幅5mm、厚さ1.5mm。

で大きく変化した地山層の最上層で、部分的だが確認した厚さ数cmの黄褐色土層が遺物を含むレス層であると確信するに至った。当遺跡はカラヤ遺跡の東南東300mの地点で同じ丘陵に属し、旧石器の遺跡として周知されており、旧石器は東300m地点に位置しており、全て多々良川南岸を形成する低段丘上に位置しており、わずかな厚さであろうが全面にレス層が堆積していると思像する。現状として居住の中心は戸原遺跡であり、その周辺にごく小規模な散布を伴う生活の痕跡が点在するのである。

・前方後円墳について

当古墳は、標高7mの低地に前方部を西側に向けて築造された、推定長28mの小型の前方後円墳で周囲に周溝を廻らす。その築造時期は、前方部正面の周溝中央部の底より検出した土師器片が布留式で久住編年ⅡB式¹¹⁾に比定されるが、小型丸底甕は在地色が強くやや新しく見積もる必要からⅡC式までを含め3世紀末～4世紀初頭とすることが可能である。共存する飯甕は分類上Ⅱ類¹²⁾となるが底面形態は不明、主に集落関連の遺跡から出土するよう古墳出土例は葛田町の石塚山古墳¹³⁾くらいであろうか。その墳丘から5個体ほどが得られている。近辺では本遺跡の北西500

mに位置する多々良田遺跡¹⁴⁾の27号・30号整穴住居跡からそれぞれ検出されており、時間的には30号(ⅢB類1点)に近い。古墳の被葬者を考える上で多々良田遺跡と直接的な関係を重視する必要がある。北側に並列する方形周溝墓とは、前方部の周溝部と方形周溝墓の南側周溝部のラインが平行しており、築造時期が一致すると考えられる。多々良田下流域に分布する古墳との比較では、戸原王塚古墳(前方後円墳)が久住編年ⅡA式¹⁵⁾相当の土器を共存しており3世紀後半と一段階古い。また、名島古墳¹⁶⁾は一段階新しく位置付けられることから両古墳の間を埋める当地域の首長墓と考えられる。おそらく、宇美町の光正寺古墳¹⁷⁾と同時期頃に位置づけられよう。

なお、当古墳は前方部を東に向け周囲に周溝を設けるが、前方部北側隅角付近に陸橋が付されている。一方、戸原王塚古墳は前方部を西に向け周囲に周溝を設けるが、やはり北側隅角に陸橋を付している。しかも、両者はともに周溝の北側を意識した構造と考えられ、当古墳の周溝は幅広く深くしつかりとしたつくり、戸原王塚古墳も幅は不明だが深さの点で70～80cmの違いがあり、所謂「見せかけのつくり」と表現した。規模的には戸原王塚古墳(48m)とカラヤ(28m)では約2倍の差があり、時期も前者が3世紀後半、後者が3世紀末～4世紀初めということで前後する関係にある。両者の距離は1.15kmと離れており、互いが視界に入るかは不明だが、双方の前方部が向き合うように構築された結果、墳丘の左右に付された陸橋部はともに北側で一致するため、互いに対称的な存在となっている。

・古墳周溝内の土器祭祀

周溝内の黒ボク状の黒色土上面あたりから一括出土している須恵器等について記すと、須恵器16点、赤焼土器6点、土師器1点となり、器種別では蓋環17点、甕4点、長頸壺1点、把手付銅1点となり須恵器の蓋環が圧倒的に多い。蓋環の示す編年の特徴は牛頭編年¹⁸⁾のⅢB期を示しており、坏蓋の口縁部内面に残る段もすでに形骸化するものもこの時期の特徴で、6世紀後半を中心とする遺物群と見て矛盾はなからう。

そこで、土器の人為的破壊行為等につ

おわりに

・旧石器について

当調査により細石器資料が2点得られたが、資料39は10cmほど堆積したレス層より検出された。平成26年度調査の内橋方見遺跡⁴⁾では、旧石器資料12点が得られ、内4点が細石器資料であった。しかし、いずれも包含層から遊離したもので層位的に確認したものはない。今回、包含層を確認するに至り、坪見遺跡において後世の遺構や攪乱によ

いて観察を行う。これは須恵器の蓋環を中心に見受けられるもので、ある種の祭祀行為を示す事例と考えられるためである。

[破損方法]

坯蓋

1 口縁部を反時計回りに順次打ち欠く。

資料4 (全周)、29・30 (半周)

2 天井部への穿孔による体部の分割と口縁部の打ち欠き。資料10・33 (全周) 坯身

3 受部から立ち上がり部分の全周を打ち欠く。資料13・16

4 立ち上がり部を打ち欠く (はつる)。

資料20

※裏は不明。

[復元後の破片欠損状況]

坯蓋

5 任意的でばらつく。資料4

6 全体を3分割、欠損部は平面図の後方側部に集中。資料10・33

7 全体の1/2が欠損、その内の一片(1/5)はカマドに塗り込められていた。資料29・30

坯身

8 平面図の欠損位置が対応する2ヶ所に区分、その範囲が対称的。資料13、16

※裏は不明

[接合関係]

9 古墳周溝内の1地点に集中。資料4、13、16、20

10 古墳周溝内の2地点に分割。資料26 (赤焼土器の甕)

11 古墳周溝と竪穴建物 資料8・32、10・33、25・37 (赤焼土器の甕)

12 竪穴建物内(カマド内部と床面) 資料29・30

以上の諸特徴から、対象となる須恵器蓋環は蓋と身に分け、個別に破損行為に及ぶ。対象部位は蓋が口縁部、身は受部から立ち上がり付近でともに口の部分。方法は直接打撃による打ち欠き、間接打撃による穿孔と「はつり」がある。対象範囲は半周から全周に及び、基本は反時計回りで連続的に打ち欠くもので、おそらく対象物を時計回りに回転させながら行うためと考えられる。また、破損後は意図的に破片を抜き取っており、「①任意的。②1か所集中。③対応する2か所に区分、範囲が対称的。」の3通りが見られる。この口縁部破片の抜き取りは大きな意味を持つようで、資料29・30で示されるようにカマド構築時

に破片を抜き取り袖部に塗り込めたもので、坯蓋本体は破損して使用できない状態ではあるが、廃棄されることなくカマドの右側近くの床面にそのまま置かれていた。この行為は須恵器の坯蓋を意図的に破損させることにより本来の器としての機能を消し去るが、かわりに別の機能を吹き込むことで例えば一部が一部でも効力を持ち続けることになる。ただし、その部位は体部でも底部でもなく口縁部に限定される。また、抜き取られた本体は廃棄されることなくある場所に残されていることが重要となる。つまり、効力を持続させるには抜き取った破片と抜き取られた本体が確実に存在するということが前提となっていたと考えられ、両者のどちらが欠けても機能が失われるといった感覚であろう。

再度、接合関係に注意すると資料8・30、10・33、25・37の3点については、古墳周溝と竪穴建物の検出資料が接合、あるいは同一個体と認定できるものである。まずは、これで古墳周溝内の土器と竪穴建物とは同時存在であるということが証明されよう。次に、建物の住人が土器を破壊し古墳の周溝に納めるという祭祀行為に深く関わったことが理解される。特に、資料10・33は本体が古墳周溝内で口縁部の小片が竪穴建物の床面から検出されている。先の建物とカマドの関係では、抜き取った小片を実際に機能するカマド内に納め本体は建物内に安置する状況である。小片は実際に効力を発揮させるため直接に物や場所に納め、本体はその効力を持続させるために安置するといった行動がとられるようである。つまり、小片が検出された竪穴建物は効力が発揮される場所であり、古墳に本体を安置し小片が効力を高める十分に発揮できるような祖霊の力を借りるものと解される。

ここで注意すべき点は、先の建物の範囲で取まるカマドの祭祀と地域の祖霊を祭るモニュメントとしての古墳を介して行う祭祀とは、規模や質を含め内容の点で大きく異なるものと考えられる。

例えば、資料10・33は小片1点が建物内で本体は周溝内であるが、失われている破片部分は多く、調査中の取りこぼしを含めてかなりの破片が抜き取られ拡散している可能性がある。また、古墳のごく一部を調査したに過ぎず北側周溝付近の遺物は西側の調査区外へと続いてお

り、当該時期の祭祀土器が前方部中央と陸橋付近に集中することから、その位置も意図的と考えられ未調査のくびれ部や後門部にも広がる可能性が高く、抜き取られ拡散した破片はかなりの数と見込めよう。仮にカマドが1片、建物内でも3片とするなら拡散した破片の先行はかなりの軒数、あるいは範囲と考えることも可能で、おそらく、集落あるいはその複数を単位とした広がりが想定され、今後、周辺における古墳時代後期の集落遺跡、とりわけ竪穴建物の調査時には検出遺物に注意を要する。

最後に、地域の祖霊を祭るモニュメントと古墳を介して行う祭祀が広範に及ぶと想定されるが、当然、当古墳前段に首長墓として構築された戸原王塚古墳を検証する必要がある。その周溝内を観察すると、各トレンチ内の13層が黒色粘質土層であるが、これは周囲の黒色粘質土層が堆積した腐植土と考えられる。第2トレンチの13層で土師器甕、第3トレンチの13～15層で須恵器蓋環、甕、甕、第7トレンチ13～15層、第10トレンチの13～14層で蓋環と甕が何れも破片で検出されている。流れ込みの可能性のあるもの、黒色土層付近に集まっている傾向が窺えよう。確実な層位出土例は多くが蓋環の破片のようで、人為的な破損、抜き取り等は不明であるが、第3トレンチのようによろまて得られた資料は牛形編年²⁸⁾のⅢBに相当する。残念ながら戸原王塚古墳の場合、前方部正面や北側周溝基底部の調査が十分ではないため、カラヤとの比較は困難であるが、周溝内で黒色土が形成されるあたりに、須恵器の蓋環を主に使用した祭祀が行われた可能性が感じられる。想像ではあるが6世紀後半、祖霊に地域の代々の首長墓に対し、祭祀信仰的な祭祀が広範に執り行われた可能性が考えらる。その背景には新たに地域外の集団がこの地に進出するに当たり、地域との新たな地縁関係を結ぶための儀式として歴代の首長墓で祭祀を執り行ったのではないかと考える。

今回観察された古墳の周溝内及び方形周溝の周溝内に堆積した黒色土は黒ボク土と思われる²⁹⁾。6世紀後半前後を通じて、墳丘やその周囲は草原のような状況で、ススキ等が生えているような状態がしばらくの間維持されており、この地に進出した集団と深く関わると想像す

る。意図的に環境を変化させた彼らは、前方後円墳の墓域内に進入し堅穴建築物を構築して居住域としても利用している。また、進出に際しては、地域の祖霊と祭祀を通して地縁を結びながら、新たな土地利用を行っている。具体的には当遺跡の南に隣接する縄遺跡等で検出された棚状に開くような溝状遺構や欠損した馬具を伴う土壘墓から、馬剣いが行われていた可能性を提示したい。当遺跡の北側に隣接する戸原鹿田遺跡¹⁶では古墳時代後期の馬歯が検出されている。馬歯に関し戸原鹿田遺跡の西側に位置する多々良込田遺跡¹⁷では8世紀中頃のものの、1.25km西の多々良遺跡¹⁸では鎌倉時代のものが検出されており、地名に関しては馬渡・馬苦勞・小草場と馬関連の地名が集中する点は要注意であろう。

註

- 1 粕屋町教育委員会2006『戸原王塚古墳』粕屋町文化財調査報告書第23集
- 2 桃崎裕輔1993『古墳に伴う牛馬供養の検討—日本列島・朝鮮半島・中国東北地

方の事例を比較して—』『古文化談叢』

第31集 古文化研究会

- 3 橋口達也1989『似非土師須恵器』『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念論文集1 横山浩一先生退官記念事業会
- 4 粕屋町教育委員会2015『内橋坪見遺跡3次』粕屋町文化財調査報告書第38集
- 5 平ノ内幸治1989『福岡県粕屋郡粕屋町戸原遺跡出土の旧石器』『福岡考古』第14号福岡考古談話会
- 6 久住健雄2006『土師器から見た前期古墳の編年』『前期古墳の再検討』発表要旨・資料集 第9回九州前方後円墳研究大会大分大会 九州前方後円墳研究会
- 7 平尾和久2003『福岡県における飯蛸壱形土器の受容と展開』『古文化談叢』第50集発刊記念論集(上)九州子文化研究会
- 8 長嶺正秀2005『筑紫政權からヤマト政權へ—豊前石塚山古墳』シリーズ遺跡を学ぶ022 新泉社
- 9 福岡市教育委員会1985『多々良込田遺跡III』福岡市埋蔵文化財調査報告書第121集

10 註1・4に同じ。

- 11 久住健雄・宮元香織2010『筑前地方における百長墓系列の再検討』『九州における百長墓系譜の再検討』追加資料2 第13回九州前方後円墳研究会鹿児島大会 九州前方後円墳研究会
- 12 宇美町教育委員会2001『国指定史跡光正寺古墳』宇美町文化財調査報告書第14集
- 13 大野城市教育委員会2008『牛頭楽跡群』能括報告書1 大野城市文化財調査報告書第77集
- 14 大野城市教育委員会2008に同じ。
- 15 サンプルの収集と分析を行っていないので確実ではない。この先、北側地区の調査が行われた際には採取と分析を行う。
- 16 粕屋町教育委員会1991『戸原鹿田遺跡』粕屋町文化財調査報告書第3集
- 17 註9に同じ
- 18 福岡市教育委員会1972『多々良遺跡調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第20集



内橋観道跡2次 南東部全景(北西から)



内橋観道跡2次 南西部全景(北から)



内橋観道跡2次 第1号奥棺墓(北から)



内橋縄道跡2次 第1号奥棺墓(北から)



内橋縄道跡2次 第2号奥棺墓(北から)



内橋縄道跡2次 第2号奥棺墓(北から)



内橋縄道跡2次 第3号奥棺墓完翻状況(東から)



内橋岡遺跡2次 第3号塗棺墓、第1号・第2号木棺墓(北東から)



内橋岡遺跡2次 第1号木棺墓完掘状況(東から)



内橋岡遺跡2次 第3号塗棺墓、第2号木棺墓完掘状況(南東から)



内橋岡遺跡2次 第1号土瓶墓(東から)



内橋岡遺跡2次 第1号土瓶墓遺物出土状況(東から)



内橋岡道跡2次 第2号土葬墓完掘状況(北から)



内橋岡道跡2次 第3号土葬墓完掘状況(北から)



内橋岡道跡2次 竪穴建物完掘状況(北から)



内橋岡道跡2次 竪立柱建物検出状況(北から)



内橋縄道跡2次 20 (第1号墓棺墓上壺)



内橋縄道跡2次 21 (第1号墓棺墓下壺)



内橋縄道跡2次 23 (第2号墓棺墓下壺)



内橋縄道跡2次 18 (罎)



内橋縄道跡2次 22 (第2号妻棺墓上壳)



内橋縄道跡2次 30(ピット)



内橋縄道跡2次 4(堅穴建物)



内橋縄道跡2次 未報告(ピット)



内橋縄道跡2次 25 (第1号土壇墓)



内橋縄道跡2次 5(堅穴建物)



内橋縄道跡2次 28 (不明土壇)



内橋カラヤ遺跡 前方後円墳周溝発出状況(東から)



内橋カラヤ遺跡 前方後円墳周溝完成状況(東から)



内橋カヤ遺跡 西半部(北から)



内橋カヤ遺跡 前方後円墳周溝北ベルト土層断面(東から)



内橋カラヤ遺跡 前方後円墳周溝東ベルト土層断面(南から)



内橋カラヤ遺跡 前方後円墳周溝南ベルト土層断面(西から)



内橋カラヤ遺跡 前方後円墳跡遺部(北東から)



内橋カラヤ遺跡 方形周溝墓完掘状況(南から)



内橋カラヤ遺跡 東半部(南西から)



内橋カラヤ遺跡 竪穴建物完備状況(南から)



内橋カラヤ遺跡 竪穴建物完備状況(南西から)



内橋カラヤ遺跡 竪穴建物カマド(南から)



内橋カラヤ遺跡 10 (前方後円墳周溝)



内橋カラヤ遺跡 29 (竪穴建物)



内橋カラヤ遺跡 7 (前方後円墳周溝)



内橋カラヤ遺跡 4 (前方後円墳周溝)



内橋カラヤ遺跡 21 (前方後円墳周溝)



内橋カラヤ遺跡 16 (前方後円墳周溝)



内橋カラヤ遺跡 2 (前方後円墳周溝)



内橋カラヤ遺跡 1 (前方後円墳周溝)

報告書抄録

ふりがな	うちはしかがみいせき2じちようさ・うちはしからやしき							
書名	内橋鏡遺跡2次調査・内橋カラヤ遺跡							
シリーズ名	粕屋町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第40集							
編著者名	福島日出海、西垣彰博							
編集機関	粕屋町教育委員会							
所在地	〒811-2314 福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目1番1号							
発行年月日	2017年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
内橋鏡遺跡2次	福岡県糟屋郡粕屋町 大字内橋字鏡595番5外	403491	280231	33°37'20"	130°27'44"	2015.6.22 ～ 2015.10.18	774㎡	県道福岡東環 状線
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
内橋鏡遺跡2次	集落、その他墳墓	弥生時代、古墳時代、奈良時代	竪穴建物、竪立柱建物、竪棺墓、木棺墓、土墳墓、溝等		弥生土器、土師器、須恵器、			
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
内橋カラヤ遺跡	福岡県糟屋郡粕屋町 大字内橋字カラヤ633番1	403491	280232	33°37'20"	130°27'44"	2015.10.13 ～ 2016.03.02	1139.6㎡	県道福岡東環 状線
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
内橋カラヤ遺跡	集落古墳	旧石器時代、古墳時代	前方後円墳、方形周溝墓、竪穴建物、竪立柱建物等		土師器、須恵器、石器		新規の前方後円墳を発見	
要約	内橋鏡遺跡2次調査は、隣接する1次調査で検出した遺構の広がりを確認できた。竪棺墓・木棺墓・土墳墓等で構成される弥生時代の墓域が列状に形成されていることを追認した。奈良時代の竪立柱建物は、近隣に位置する官衙遺跡の内橋坪見遺跡との関連に注意を要するものである。内橋カラヤ遺跡では、削平により墳丘を消失して地下に埋没していた前期前方後円墳の前方部を確認した。多々良川流域の首長墓系列において、戸原王塚古墳（粕屋町）と名島古墳（福岡市）の間を補完する首長墳と位置付けられる。							

内橋鏡遺跡2次調査・内橋カラヤ遺跡 粕屋町文化財調査報告書第40集

平成29年3月31日 発行

発行 粕屋町教育委員会
〒8112314 福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目1番1号（粕屋町立歴史資料館）
TEL：092-939-2984 FAX：092-938-0733

印刷・製本 株式会社九州カスタム印刷
〒8120007 福岡県福岡市博多区東比恵3丁目16-15
TEL：092-414-7554 FAX：092-414-7560